

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

15.01.03

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日
Date of Application:

2002年 9月18日

REC'D 14 MAR 2003

出願番号
Application Number:

特願2002-270846

[ST.10/C]:

[JP2002-270846]

出願人
Applicant(s):

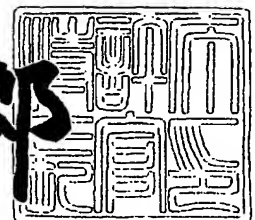
松下電器産業株式会社

PRIORITY
DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2003年 2月25日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田信一郎



出証番号 出証特2003-3010629

【書類名】 特許願

【整理番号】 186011

【提出日】 平成14年 9月18日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 H04L 12/00

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器産業株式会社内

【氏名】 上野 玲子

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器産業株式会社内

【氏名】 新谷 保之

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器産業株式会社内

【氏名】 川原 千尋

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器産業株式会社内

【氏名】 辻 誠三

【特許出願人】

【識別番号】 000005821

【住所又は居所】 大阪府門真市大字門真1006番地

【氏名又は名称】 松下電器産業株式会社

【代理人】

【識別番号】 100062144

【弁理士】

【氏名又は名称】 青山 葆

【選任した代理人】

【識別番号】 100086405

【弁理士】

【氏名又は名称】 河宮 治

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 特願2002- 6497

【出願日】 平成14年 1月15日

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 特願2002- 28342

【出願日】 平成14年 2月 5日

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 特願2002- 44765

【出願日】 平成14年 2月21日

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 013262

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9602660

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 ルータ装置およびルータ装置の設定方法

【特許請求の範囲】

【請求項1】 複数のサブネットによりなるネットワーク内にネットワーク全体のサブネット識別子情報の管理を行う親ルータ装置が存在し、1以上の第1のネットワーク機器がつながった第1のサブネットと、1以上の第2のネットワーク機器がつながった第2のサブネットとは、ルータ装置を介してつながり、親ルータ装置、ルータ装置、第1のネットワーク機器、第2のネットワーク機器はそれぞれ、サブネットを規定し、サブネット内では同一の値を有するネット番号と、各サブネット内では異なる値を有する機器番号を有し、前記ルータ装置は、第1のサブネット用の第1のネット番号と第1のルータ機器番号、および、第2のサブネット用の第2のネット番号と第2のルータ機器番号を有し、ルータ装置自身の第1のネット番号が、接続された第1サブネットのルータ装置またはネットワーク機器のネット番号と異なる時は、ルータ装置自身の第1のネット番号を前記親ルータ装置またはネットワーク機器のネット番号に書き換える、ルータ装置自身の第2のネット番号が、接続された第2サブネットのルータ装置またはネットワーク機器のネット番号と異なる時は、ルータ装置自身の第2のネット番号を前記第2サブネットに接続され他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号に書き換えることを特徴とするルータ装置。

【請求項2】 前記ルータ装置自身の第1及び第2のネット番号を、それぞれのサブネット上の他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号に書き換える時は、それぞれのサブネット上のルータ装置より取得したネット番号を優先して採用することを特徴とする請求項1記載のルータ装置。

【請求項3】 前記ルータ装置自身の第1及び第2のサブネット内での機器番号として、ルータ装置自身に予め設定されるか或いはルータ装置自身が再起動前に取得し保持していた機器番号を用いることを特徴とする請求項1又は請求項2記載のルータ装置。

【請求項4】 前記ルータ装置自身の第1及び第2のサブネットのネット番号として、前記ルータ装置が接続された第1及び第2のサブネットの他のルータ

装置またはネットワーク機器のネット番号の中で、一番多いネット番号を用いることを特徴とする請求項 1～請求項 3 のいずれか 1 項に記載のルータ装置。

【請求項 5】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のサブネットのネット番号として、前記ルータ装置が接続された第 1 及び第 2 のサブネットの他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号の中で、サブネットのネット番号を付与されていない状態を示すネット番号を除いたネット番号の中で、一番多いネット番号を用いることを特徴とする請求項 1 記載のルータ装置。

【請求項 6】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のサブネットのネット番号として、前記ルータ装置が接続された第 1 及び第 2 のサブネットの他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号の中で、予め前記ルータ装置が保持していたネット番号と同じものがあつた場合に、そのネット番号を用いることを特徴とする請求項 1 記載のルータ装置。

【請求項 7】 ルータ装置自身が接続されたサブネット上の全てのルータ装置に対して行う問い合わせにより取得したそれぞれのルータ装置の情報の中に、前記ルータ装置と同じサブネットの間に位置する情報を持つルータ装置が存在する場合には、ルータ装置ではなく他のネットワーク機器として起動することを特徴とするルータ装置。

【請求項 8】 ルータ装置自身が接続されたサブネット上のルータ装置に対して行う問い合わせにより、接続された全てのルータ情報を取得した場合に、前記ルータ装置と同じサブネットの間に位置するルータ装置の情報を元に、自身のそれぞれのサブネット上の機器番号を、前記全てのルータ情報内に記録されている値に変更することを特徴とするルータ装置。

【請求項 9】 ルータ装置自身が接続されたサブネットのネット番号と異なるネット番号を自己のサブネットの識別子の値として設定されている、または、設定した、前記サブネット内に存在する、他のルータ装置やネットワーク機器からの、前記サブネット内に閉じたネット番号の問い合わせに対しては、問い合わせを破棄することなく応答を返すことを特徴とするルータ装置。

【請求項 10】 複数のサブネットによりなるネットワーク内の装置で、システム内で一意に規定されたネット番号とサブネット内で一意に規定される機器

番号によりシステム内で一意に指定されるネットワーク機器において、前記機器に設定されたネット番号と異なる値のネット番号を自己のネット番号として設定されている、または、設定した装置からの前記サブネット内に閉じたネット番号の問い合わせに対して、応答を返すように構成することを特徴とするルータ装置。

【請求項 11】 ルータ装置自身が接続された複数のサブネットの少なくとも一つにおいて、前記サブネット上のルータ装置或いはルータ装置以外のネットワーク機器により取得し確定した前記サブネットのネット番号が、サブネット値を付与されていない状態を示すデフォルトの値である場合には、サブネットの値を付与する機能を持つ親ルータから前記デフォルトの値を持つネット番号を付与されるまでは、ルータ機能を起動させないことを特徴とするルータ装置。

【請求項 12】 前記ルータ装置は、ネット番号を設定する前に前記ルータ装置自身の機器番号を前記第 1 のサブネット又は前記第 2 のサブネットで未付与の機器番号に設定することを特徴とする請求項 1～請求項 11 のいずれか 1 項に記載のルータ装置。

【請求項 13】 複数のサブネットによりなるネットワーク内にネットワーク全体のサブネット識別子情報の管理を行う親ルータ装置が存在し、1 以上の第 1 のネットワーク機器がつながった第 1 のサブネットと、1 以上の第 2 のネットワーク機器がつながった第 2 のサブネットとが、ルータ装置を介してつながり、親ルータ装置、ルータ装置、第 1 のネットワーク機器、第 2 のネットワーク機器は、それぞれ、サブネットを規定し、サブネット内では同一の値を有するネット番号と、各サブネット内では異なる値を有する機器番号を有し、前記ルータ装置は、第 1 のサブネット用の第 1 のネット番号と第 1 のルータ機器番号、および、第 2 のサブネット用の第 2 のネット番号と第 2 のルータ機器番号を有し、ルータ装置自身の第 1 のネット番号が接続された第 1 サブネットのルータ装置またはネットワーク機器のネット番号と異なる時は、ルータ装置自身の第 1 のネット番号を前記親ルータ装置またはネットワーク機器のネット番号に書き換える、ルータ装置自身の第 2 のネット番号が接続された第 2 サブネットのルータ装置またはネットワーク機器のネット番号と異なる時は、ルータ装置自身の第 2 のネット番号

を前記第 2 サブネットに接続され他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号に書き換えることを特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項 1 4】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のネット番号を、それぞれのサブネット上の他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号に書き換える時は、それぞれのサブネット上のルータ装置より取得したネット番号を優先して採用することを特徴とする請求項 1 3 記載のルータ装置の設定方法。

【請求項 1 5】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のサブネット内での機器番号として、ルータ装置自身に予め設定されるか或いはルータ装置自身が再起動前に取得し保持していた機器番号を用いることを特徴とする請求項 1 3 又は請求項 1 4 記載のルータ装置の設定方法。

【請求項 1 6】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のサブネットのネット番号として、前記ルータ装置が接続された第 1 及び第 2 のサブネットの他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号の中で、一番多いネット番号を用いることを特徴とする請求項 1 3 ～請求項 1 5 のいずれか 1 項に記載のルータ装置の設定方法。

【請求項 1 7】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のサブネットのネット番号として、前記ルータ装置が接続された第 1 及び第 2 のサブネットの他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号の中で、サブネットのネット番号を付与されていない状態を示すネット番号を除いたネット番号の中で、一番多いネット番号を用いることを特徴とする請求項 1 3 記載のルータ装置の設定方法。

【請求項 1 8】 前記ルータ装置自身の第 1 及び第 2 のサブネットのネット番号として、前記ルータ装置が接続された第 1 及び第 2 のサブネットの他のルータ装置またはネットワーク機器のネット番号の中で、予め前記ルータ装置が保持していたネット番号と同じものがあつた場合に、そのネット番号を用いることを特徴とする請求項 1 3 記載のルータ装置の設定方法。

【請求項 1 9】 ルータ装置自身が接続されたサブネット上の全てのルータ装置に対して行う問い合わせにより取得したそれぞれのルータ装置の情報の中に、前記ルータ装置と同じサブネットの間に位置する情報を持つルータ装置が存在する場合には、ルータ装置ではなく他のネットワーク機器として起動することを

特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項20】 ルータ装置自身が接続されたサブネット上のルータ装置に対して行う問い合わせにより、接続された全てのルータ情報を取得した場合に、前記ルータ装置と同じサブネットの間に位置するルータ装置の情報を元に、自身のそれぞれのサブネット上の機器番号を、前記全てのルータ情報内に記録されている値に変更することを特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項21】 ルータ装置自身が接続されたサブネットのネット番号と異なるネット番号を自己のサブネットの識別子の値として設定されている、または、設定した、前記サブネット内に存在する、他のルータ装置やネットワーク機器からの、前記サブネット内に閉じたネット番号の問い合わせに対しては、問い合わせを破棄することなく応答を返すことを特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項22】 複数のサブネットによりなるネットワーク内の装置で、システム内で一意に規定されたネット番号とサブネット内で一意に規定される機器番号によりシステム内で一意に指定されるネットワーク機器において、前記機器に設定されたネット番号と異なる値のネット番号を自己のネット番号として設定されている、または、設定した装置からの前記サブネット内に閉じたネット番号の問い合わせに対して、応答を返すように構成することを特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項23】 ルータ装置自身が接続された複数のサブネットの少なくとも一つにおいて、前記サブネット上のルータ装置或いはルータ装置以外のネットワーク機器により取得し確定した前記サブネットのネット番号が、サブネット値を付与されていない状態を示すデフォルトの値である場合には、サブネットの値を付与する機能を持つ親ルータから前記デフォルトの値を持つネット番号を付与されるまでは、ルータ機能を起動させないことを特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項24】 前記ルータ装置は、ネット番号を設定する前に前記ルータ装置自身の機器番号を前記第1のサブネット又は前記第2のサブネットで未付与の機器番号に設定することを特徴とする請求項13～請求項23のいずれか1項に記載のルータ装置の設定方法。

【請求項 2 5】 サブネット間を結合するルータ装置であって、 前記ルータ装置は、サブネットのネット番号とマスタールータかスレーブルータかを指定するマスタールータ識別子とを含むマスタールータ情報を保持することを特徴とするルータ装置。

【請求項 2 6】 前記ルータ装置は、サブネットに接続する他のルータ装置からマスタールータ情報を取得し、前記取得したマスタールータ情報のマスタールータ識別子がマスタールータである場合に、前記マスタールータ情報のネット番号を自己のネット番号とすることを特徴とする請求項 2 5 記載のルータ装置。

【請求項 2 7】 前記ルータ装置は、サブネットに接続する他のルータ装置に対して行うマスタールータ情報の取得要求により、他のルータ装置からの応答がない場合に、サブネットに接続するネットワーク機器のネット番号を参照して自己のネット番号を付与することを特徴とする請求項 2 5 記載のルータ装置。

【請求項 2 8】 前記ルータ装置は、前記マスタールータ識別子がマスタールータであるマスタールータ情報を複数取得した場合は、前記ルータ装置を起動しないことを特徴とする請求項 2 6 記載のルータ装置。

【請求項 2 9】 サブネット間を結合するルータ装置の設定方法であって、
前記ルータ装置は、サブネットのネット番号とマスタールータかスレーブルータかを指定するマスタールータ識別子とを含むマスタールータ情報を保持し、サブネットに接続する他のルータ装置からマスタールータ情報を取得し、前記取得したマスタールータ情報のマスタールータ識別子がマスタールータである場合に、前記マスタールータ情報のネット番号を自己のネット番号とすることを特徴とするルータ装置の設定方法。

【請求項 3 0】 請求項 1 3 ～ 2 3、2 9 のいずれか 1 項に記載の方法を、コンピュータに機能させるためのプログラムを記録した記録媒体。

【請求項 3 1】 請求項 1 3 ～ 2 3、2 9 のいずれか 1 項に記載の方法を、コンピュータに機能させるためのプログラム。

【発明の詳細な説明】

【0 0 0 1】

【発明の属する技術分野】

本発明は、物理的に異なる複数のネットワークを接続して一つのシステムとする為のルータ装置に関する。

【0,002】

【従来の技術】

本発明が適用されるネットワークとしては、主にホームネットワークがある。ホームネットワークに接続される機器は、安価な家電製品であり、その動作においては高い信頼性が要求される。また、ホームネットワークに接続される機器は、同一の機器がセキュリティシステムと遠隔制御システムなどホームネットワークを介して複数の用途に利用される。

【0003】

一般家庭におけるシステムの構成例を図1に概念的に示す。図1において、冷蔵庫1、洗濯機2、エアコン3、TV4、コントローラ11等が電灯線15に接続され、電子レンジ5、風呂（給湯器）6、ガスレンジ7等が無線16に接続され、睡眠センサ8、侵入センサ9、電話機10等セキュリティ機器が専用線14に接続され、電灯線15と専用線14はルータ装置12で接続され、電灯線15と無線16はルータ装置13で接続され、これにより宅内のネットワークを構成している。

【0004】

以上のほかに、接続される機器は照明機器など家庭内の各種家電が考えられ、また伝送媒体も、電灯線、無線、専用線以外に赤外線なども考えられる。また、コントローラも、本図のように一つではなく、サービスの目的別に複数のものが接続される構成が考えられる。

【0005】

ネットワークに接続される機器やルータを一般表記したシステム構成例を図2に示す。本図において、21～23はサブネットを、21a～23dはサブネット21～23上に接続されるネットワーク機器を、31～32はルータ装置やその役を担う機器を示す。これらのネットワークの効果的な作用発揮のために、日本電子機械工業会やECHONETコンソーシアムなどにて各種規格やその案も定められたり、発表されたりしている（例えば、ET-2010、ECHONET規格Ver.1.00等）。

【 0 0 0 6 】

従来、例えば、図 2 において、既にルータ装置 3 1 が起動しており、且つネットワーク機器 2 1 a がサブネットのネット番号を付与する親ルータ機能を持つとする。この場合、新たにルータ装置 3 2 をシステム上で起動させる場合には、まず、それぞれのサブネット 2 1、2 3 上で、それぞれ一つのネットワーク機器 2 1 c、2 3 d として起動し、それぞれのサブネット 2 1、2 3 上にルータ装置が存在するかどうかの問い合わせを行い、全てのサブネット上にルータ装置が存在する場合には、自分自身は、ルータとしての機能を起動せずに、それぞれのサブネット上の一つのネットワーク機器として起動するのみだった。

【 0 0 0 7 】

また、もし、複数のサブネット 2 1、2 3 のうち少なくとも一つのサブネット 2 1 上にルータ装置 3 1 が存在し、さらに少なくとも一つのサブネット 2 3 上にルータ装置が存在しない場合に、存在を確認したルータ装置 3 1 に対して、問い合わせを行い、サブネットの識別子としてのネット番号を付与する機能のあるルータ装置（以下親ルータと呼ぶ）の情報（本実施の形態ではネットワーク機器 2 1 a）を取得し、前記親ルータ機能を持つネットワーク機器 2 1 a に対して、自分自身のルータ装置 3 2 としての必要な情報（ルータ装置としての識別子や、あらたにシステムに加わることとなるサブネットのネット番号）を要求し、前記親ルータ 2 1 a から取得した前記ルータ装置としての必要な情報を元に、新たにネット番号を付与することとなったサブネット 2 3 上の全ネットワーク機器 2 3 a ～ 2 3 c にネット番号を渡していた。

【 0 0 0 8 】

また、ネットワーク機器は、このサブネットの識別子として付与されるネット番号とサブネット内で自身を一意に決定する識別子として付与される機器番号により、複数のサブネットをルータ装置により結合したシステム全体の中で唯一に識別できるものとなる。

【 0 0 0 9 】

従来の方法及び装置では、ルータ装置が以前に立ち上がった順番に起動していく場合には問題無く起動できるが、既にルータ装置によりサブネットにネット番

号が付与され（サブネットに接続されるネットワーク機器に同じネット番号が付与され）、そのサブネット内の全ネットワーク機器がそのネット番号を利用して、システム内で情報のやり取りを行っている場合に、停電等により一斉に電源がOFFとなりリセットが発生した場合には、3つ以上のサブネットにより構成されるシステムでは、ルータの立ち上がりの順番にサブネットの識別子の値（ネット番号）を与えるようになっている場合は、ルータの立ち上がりの順番によっては、サブネットにリセット発生前と異なるサブネットの識別子の値（ネット番号）が与えられるサブネットが存在してしまう。例えば、図2の例でいえば、最初にルータ装置31が起動し、サブネットBのネット番号を付与され、その後ルータ装置32が起動し、サブネットCのネット番号を付与されていた場合に、停電等による再起動時に、先にルータ装置32が起動し、サブネット番号を付与され後からルータ装置31が起動し、サブネット番号を付与される場合には、ルータ装置32に接続されたサブネットCがサブネットBとして設定され、ルータ装置31に接続されたサブネットBがサブネットCとして設定されることがありえる。

【0010】

さらに、システムを構成するルータ装置の一つのみがリセット、或いは交換される場合で、そのルータ装置の属する全てのサブネットに他ルータ装置が存在する場合には、単独でリセット或いは交換されたルータ装置は、それぞれのサブネット上でのネットワーク機器としてのみ起動し、ルータ装置としての機能は起動しないこととなる。

【0011】

これらは例えば、ホームネットワークの場合には、一時的な停電時などに、システム全体が立ち上がるのに非常に時間がかかるとか、再起動時に、停電前の各機器の識別の情報と停電復旧後の情報が異なり、コントローラなどにおいては、家庭においては混乱が発生し、都度専門家が呼び出されるというような状況を招く危険をはらんでいる。

【0012】

また、ルータ装置の交換において、簡単には交換できずに、交換する人間（一般家庭の人）が、交換前にルータ装置が接続されることになるサブネットの情報

をルータに表示装置を具備して表示するなど何らかの手段により取得し、交換後のルータ装置にスイッチなどによりその情報を設定することが必要である。この人を介した設定では、設定誤りが生じることもあり、その場合には、システムとしての機能がうまく動作しないということもありえる。

【0013】

【発明が解決しようとする課題】

従来の方式及び装置では、置き換え或いは電源リセットがかかったルータ装置の属する全てのサブネットに他のルータ装置が存在し、既にネット番号が付与されている場合には、置き換え或いは電源リセットがかかったルータ装置は、ルータ装置としての機能を発動せず、一般のネットワーク機器としてのみ起動することとなり、ルータ装置により本来接続されるべきサブネット間での電文のやり取りが実施できないという課題を有していた。

【0014】

また、従来の方式及び装置では、置き換え或いは電源リセットがかかったルータの属する一つ以上のサブネットにルータ装置が存在し、他の一つ以上のサブネットにルータ装置が存在しない場合には、ルータ装置としての機能を起動するが、新たに親ルータによってルータ装置の存在しないサブネットにネット番号が付与されることとなり、置き換え或いは電源リセット前とは異なるネット番号が付与されることとなり、当該サブネット上のネットワーク機器をシステム内で一意に識別するネット番号が、親ルータ装置、当該ルータ装置、各ネットワーク機器などの間で異なることとなり、当該サブネット上のネットワーク機器として、前記ルータ装置の置き換え或いは電源リセット前に通信していた他のサブネット上のネットワーク機器は、それまでの通信相手の識別情報（ネット番号）が変わったことを認識できず、通信を行おうとした時に相手が存在しないなどの異常と判断することとなるという課題もあった。

【0015】

また、従来の方式及び装置では、置き換え或いは電源リセットがかかったルータ装置の属する一つ以上のサブネットに別のルータ装置が存在し、他の一つ以上のサブネットにルータ装置が存在せず、従って、ルータ装置として起動できる状

況であっても、親ルータ装置が多数のサブネットを隔てて遠隔にあり、かつ、その途中のルータの故障している場合のように、親ルータ装置と電文のやり取りができない場合には、ルータ機能を発動せず、一般のネットワーク機器としてのみ起動することとなり、前記ルータ装置により従来接続されてサブネットのネットワーク機器間のみでの電文のやり取りも全体のシステムが起動するまで実施できないという課題もあった。

【0016】

また、次のような課題も有る。

【0017】

通常、あるサブネット上のルータ装置や各機器が、そのサブネット内のルータ装置や各機器に、或いは、別のサブネット上のルータ装置や各機器と、お互いに通信するには、送信元は、自己のネット番号と機器番号、および、受信先（送信先）のネット番号と機器番号を、電文データに付加して送信する。受信側は、受信した電文に付加されている受信先のネット番号と機器番号を読み取り、自己のネット番号と機器番号と照合して、電文データを受取るかどうかの選択を行う。その際、受信側は、受信電文のホップ数とネット番号を確認し、ホップ数が0であるにも関わらず送信元のネット番号が自己のネット番号の値と異なる場合は受信電文を破棄する場合がある。一斉同報通信形式の電文を受取った場合は、電文に記載された受信先の機器番号が自己の機器番号に一致していなくとも、電文データを受取り、要求内容に対して所定の処理を行う。また、サブネットA上の機器が発信した電文を、サブネットAの外側であるサブネットB上の機器に送信する場合は、サブネットAとBとを結合するルータ装置が、通常は、ホップ数を1カウントアップした値にして、サブネットBに送り出す。

【0018】

送信元の機器が保有するネット番号と、受信機器が保有するネット番号とが一致しない場合は、別のサブネット上で発信された電文が、何らかの誤動作により、到着した恐れがある。ホップ数情報を使用する場合、ネット番号が不一致で、ホップ数情報が0であれば、異常が発生している恐れがある。このようなままで、電文データを読み取って、実行すると、あるサブネット内の誤動作や故障のた

めに、別のサブネット上のネット番号や、機器番号が、不必要に更新、変更されてしまい、不具合が多数のサブネットに広がってゆく恐れがある。これを避けるために、通常は、このような異常と思われる電文は、受信機器において、破棄するようにする。

【0019】

ところが、上記のようにルータ装置の電源を立ち上げ直したり、ルータ装置を交換する場合は、ルータ装置は、自身が接続されているサブネットA、Bのネット番号を知らない状態で、サブネットA、B上の親ルータ装置、別のルータ装置、各ネットワーク機器に対して、ネット番号を問い合わせるようにすることを、本発明では提案している。この時に、ルータ装置が、送信電文に付ける自己、即ち、送信元のネット番号は、仮の番号にせざるを得ないので、問い合わせ先、即ち、受信先の機器が保有しているネット番号と一致するとは限らない。上記のような不一致の際に、電文を破棄するという規則に従うと、ネット番号を教えてもらうことができなくなるという問題があった。

【0020】

つぎのような問題も考えられる。あるサブネットに、機器が新たに接続されたり、その機器が携帯機器であって、そのサブネットの領域内に移動してきた場合などにおいては、通常は、サブネット内で一意に決まる機器番号を入手後、サブネットのネット番号を入手するのであるが、何らかの理由で、ネット番号を未入手の場合は、デフォルト値を一時的にネット番号として用いることがある。他のサブネットにも、同様の理由により、一時的にデフォルト値をネット番号として用いる機器が存在している場合がある。すなわち、ネットワークドメイン全体を見ると、一時的かもしれないが、ネット番号がデフォルト値になっている機器が複数個存在する可能性がある。このような状態で、そのような機器が、サブネットを超えた相手先に電文を発行したり、一斉同報の電文を発行した場合、ルータ装置がサブネットを超えてルーティングすると、他のサブネット上の機器でネット番号がデフォルト値のものやルータ装置は、本来処理しなくてよい電文を受けることになり、余分な処理が発生する恐れがある。特に、その電文が応答を要求する電文の場合、ルータ装置が応答電文を発行すると、同じサブネット上の機器

の方も電文を受取り、その機器は無駄な処理を行なうことになる。あるいは、送信元の機器から何らかの電文を受けたサブネット上のルータ装置や親ルータ装置は、自サブネット内の機器からの電文と判断し、システム上問題が発生する可能性が高くなる。とくに、ホップ数を監視してホップ数により適正な処理を行なう機能が無い場合や、その機能が故障している場合には、このようなことが起こりうる。

【0021】

本発明は、上述した従来のこのような課題を解決し、システム全体としてリセットがかかった場合、また、特定のルータが単独でリセットがかかった場合或いは置き換えを行った場合でも、全体システムとして或いは部分的なシステムとしては支障無く、置き換え以前の状態を自動的に維持する方式及び装置を提供することを目的とする。

【0022】

【課題を解決するための手段】

請求項1又は請求項13記載の発明は、ルータの取り替え時或いは再起動時のルータ起動時に、前記ルータが接続されたサブネット上のルータに対して行う問い合わせによりサブネットの識別子情報を取得した場合に、前記ルータのそのサブネットに属する側の保持するサブネットの識別子情報を、他のルータまたはルータ以外の機器に対して行う問い合わせにより取得した識別子情報に書き換える。これにより、ルータの置き換え或いは再起動が行われた際に、以前のサブネットの識別子情報にて立ち上げ処理ができることになり、ルータの置き換え或いはリセット時に、機器のサブネットの識別子情報が毎回書き換わるということを防げる。

【0023】

請求項2又は請求項14記載の発明は、ルータの取り替え時或いは再起動時のルータ起動前の問い合わせとして、サブネット上のルータ以外の機器に優先して、ルータに対して行い、問い合わせにより取得した識別子情報に書き換えを行う。これにより、サブネット上にルータが存在する場合には、サブネット上での不要な通信を削減できるとともに、ルータ以外の機器の負荷を軽減できる。

【0024】

請求項3又は請求項15記載の発明は、ルータの再起動時に、サブネット内で異なる値となる機器情報として、再起動前に保持していた情報で予め立ち上がる。これにより、サブネットの識別子情報として再起動前の値を取得できれば、再起動前と同じ識別子の情報で電文の送受信が実施できることとなる。

【0025】

請求項4又は請求項16記載の発明は、ルータの取り替え時或いは再起動時に、ルータ或いはルータ以外の機器から取得したサブネットの識別子情報が複数存在する場合に、取得したサブネットの識別子情報の中から多数決にて決定する。これにより本発明では、一番多く通信可能な状態での通信が行える事となる。

【0026】

請求項5又は請求項17記載の発明は、ルータ或いはルータ以外の機器から取得したサブネットの識別子情報が複数存在する場合に、サブネットの識別子情報を多数決により決定する前に、デフォルトの値（サブネット値を付与されていない状態を示す値）を除いた情報での多数決で決定する。これにより、サブネットの識別子情報がデフォルトの値となることを防げる。

【0027】

請求項6又は請求項18記載の発明は、ルータの再起動時に、ルータ或いはルータ以外の機器から取得したサブネットの識別子情報が複数存在する場合に、再起動前に保持していた情報と同じものがあつた場合に、その値を採用する。これにより、サブネットの識別子情報として再起動前の状態へ復旧が容易となる。

【0028】

請求項7又は請求項19記載の発明は、接続されたサブネット上の全てのルータに対して行う問い合わせによりそれぞれのルータの情報を取得した場合に、自身と同じサブネットの間に位置するルータが存在しないことを確認した場合に、ルータ機能を起動する。これにより、電文情報の中に、特別な情報やルータ自身に特別の手段を具備することなく、複数の経路による電文の輻輳を回避することができる。

【0029】

請求項 8 又は請求項 20 記載の発明は、接続されたサブネット上のルータに対して行う問い合わせにより接続された全てのルータ情報を取得した場合に、自身と同じサブネットの間に位置するルータの情報を元に、自身のそれぞれのサブネット上の機器の識別子を、前記情報と同じになるように変更して、ルータ機能を起動する。これにより、置き換え前、或いは再起動前のルータの状態に復旧することができ、他の機器から本ルータを指定する際に、本来利用していた情報で指定することができ、新たに設定変更をする必要が無くなる。

【0030】

請求項 9 又は請求項 21 記載の発明は、ルータにおいては、接続されたサブネットの識別子と異なるサブネットの識別子を自己の識別子として設定した機器からの当該サブネット内に閉じたサブネットの識別子情報の問い合わせに対しても応答を返すように構成する。これにより、置き換え、或いは再起動した装置が、接続されたサブネットの識別子を知る為に、全てのサブネットの識別子の情報で試してみる必要がなくなり、サブネット内の通信のトラフィックの軽減が図れる。さらに、接続されたサブネットの識別子を知りたい装置において、処理負荷が軽減される。

【0031】

請求項 10 又は請求項 22 記載の発明は、ルータを含む全ての機器において、接続されたサブネットの識別子と異なるサブネットの識別子を自己の識別子として設定した機器からの当該サブネット内に閉じたサブネットの識別子情報の問い合わせに対しても応答を返すように構成する。これにより、ルータの無いサブネットにおいても、置き換え或いは再起動した装置が、接続されたサブネットの識別子を知る為に、全てのサブネットの識別子の情報で試してみる必要がなくなり、サブネット内の通信のトラフィックの軽減が図れる。さらに、接続されたサブネットの識別子を知りたい装置において、処理負荷が軽減される。

【0032】

請求項 11 又は請求項 23 記載の発明は、ルータの取替え時或いは初期起動時或いは再起動時に、ルータが接続されたサブネット上の少なくとも一つにおいて、接続されたサブネットの識別子がデフォルトの値（サブネット値を付与されて

いない状態)であると確定した場合には、親ルータ(サブネットの値を付与する機能を持つルータ)から前記デフォルトの値を持つサブネットの識別子を付与されるまでは、電文のルーティング処理は行わない。これにより本発明では、親ルータがシステムに参入した際に、既に付与済のサブネットの識別子を持つ機器の情報を変更することなく、デフォルトのサブネットの識別子の値を持つサブネットに対してのみ、新たな値を付与することができ、システムの情報管理が容易となる。これらは例えば、ホームネットワークの場合には、家庭における利用者の混乱を軽減し、ルータ装置の交換においても、専門家を必要とせずに簡単には交換でき、システムの機能ダウンを最小限に留めるシステムの構築が可能となる。

【 0 0 3 3 】

請求項 1 2 又は請求項 2 4 記載の発明は、ルータ装置のネット番号を設定する前にまずルータ装置の機器番号をサブネットに接続するネットワーク機器や他のルータ装置に使用されていない機器番号に暫定的に付与する。これにより、ルータ装置がサブネットに接続された場合にルータ装置の機器番号を認識出来るためルータ装置自身のネット番号を付与するためのネットワーク上の通信処理を可能とする。

【 0 0 3 4 】

請求項 2 5 に記載の発明は、ルータ装置が、サブネットのネット番号とマスタールータかスレーブルータかを指定するマスタールータ識別子とを含むマスタールータ情報を保持することを特徴とする。従って、簡単な情報により、ループの発生を防止できる。

【 0 0 3 5 】

請求項 2 6 に記載の発明は、サブネットに接続する他のルータ装置からマスタールータ情報を取得し、取得したマスタールータ情報のマスタールータ識別子がマスタールータである場合に、マスタールータ情報のネット番号を自己のネット番号とすることを特徴とする。

【 0 0 3 6 】

請求項 2 7 記載の発明は、ルータ装置は、サブネットに接続する他のルータ装置に対して行うマスタールータ情報の取得要求により、他のルータ装置からの応答

がない場合に、サブネットに接続するネットワーク機器のネット番号を参照して自己のネット番号を付与することを特徴とする。

【 0 0 3 7 】

請求項 2 8 の発明は、ルータ装置は、マスタールータ識別子がマスタールータであるマスタールータ情報を複数取得した場合は、ルータ装置を起動しないことを特徴とする。よって、ループの発生が確実に防止できる。

【 0 0 3 8 】

請求項 2 9 記載の発明は、ルータ装置は、サブネットのネット番号とマスタールータかスレーブルータかを指定するマスタールータ識別子とを含むマスタールータ情報を保持し、サブネットに接続する他のルータ装置からマスタールータ情報を取得し、取得したマスタールータ情報のマスタールータ識別子がマスタールータである場合に、前記マスタールータ情報のネット番号を自己のネット番号とすることを特徴とする。

【 0 0 3 9 】

なお、上記請求項において、ルータ装置は、断らない限り、親ルータ装置を含むものとする。

【 0 0 4 0 】

【発明の実施の形態】

以下、本発明にかかる実施の形態について、図面を参照しながら説明する。

【 0 0 4 1 】

図 3 は、本発明のルータ装置 3 1 の一構成例である。本図において、3 1 0 は電源再投入時或いは入れ替え時などの起動時の処理を行うルータ立ち上げ処理部である。3 1 1 はシステム全体に存在するルータの全情報を保持する全ルータ情報保持部、3 1 2 はサブネットのネット番号をルータに付与する機能を有する親ルータの情報を保持する親ルータ情報保持部、3 1 3 は本発明のルータ装置のもつ複数のサブネット識別符号情報を保持するサブネット識別符号情報保持部、3 1 4 a と 3 1 4 b はルータ立ち上げ処理部により起動されそれぞれのサブネット上のサブネット識別のネット番号を他のルータ装置、或いはネットワーク機器に請求する処理を行うサブネット識別符号情報請求手段、3 1 5 a と 3 1 5 b は他

のルータ装置からサブネット識別情報を要求された際に当該ルータ自身の持つサブネット識別符号情報を通知処理するサブネット識別符号情報通知手段、316aと316bはサブネット識別符号情報請求手段314a、314bにより請求した情報の応答を確認するサブネット識別符号情報確認手段、317aと317bは受信電文の解析を行い所定の手段に受け渡し処理を行う受信電文解析処理部、318はサブネットAとサブネットBの間で送受信される電文の受け渡しを行う電文ルーティング処理部、319aと319bはサブネット内に閉じたサブネット上の通信処理を実現するサブネット内通信処理部である。

【0042】

図4は、本発明のルータ装置のもつサブネット識別符号の一構成例である。41は本発明のルータ装置をシステムの中で一意に規定するルータ識別子情報、42は本発明のルータ装置が接続されるサブネットの数情報、43は本発明のルータ装置が接続される一つのサブネットのネット番号情報、44は本発明のルータ装置が接続される一つのサブネット内での機器番号、45は本発明のルータ装置が接続される別の一つのサブネットのネット番号情報、46は本発明のルータ装置が接続される別の一つで45にて示されたサブネット内での機器番号を示す。

【0043】

図5は、本発明のルータ装置のもつ親ルータの情報の一構成例である。51は親ルータ装置の持つネット番号、52は親ルータ装置の持つサブネット上で送受信するための情報である機器番号を示す。親ルータ情報は、親ルータ情報保持部312に格納される。

【0044】

親ルータ装置やルータ装置は、図4のサブネット識別符号、即ち、個々のルータ情報を、全ネットワーク内の全ルータについて集めたものを、全ルータ情報として保有している。全ルータ情報は、全ルータ情報保持部311に格納される。自己が接続されているサブネットに関する自己のルータ情報は、サブネット識別符号情報保持部313に格納される。

【0045】

以下、図1～図5を用いて、本願発明を説明する。

【 0 0 4 6 】

図 3 のルータ立ち上げ処理部 3 1 0 は、初期電源投入時或いは再起動時に、本ルータ装置が属するサブネット A 2 1 上のルータ装置 3 2 或いはネットワーク機器 2 1 a、2 1 b に対して、サブネットの識別符号情報を取得処理するサブネット識別符号情報請求手段 3 1 4 a を起動する。サブネット識別符号情報請求手段 3 1 4 a では、サブネット A 2 1 に接続される全てのルータ装置に対してサブネット識別符号を要求する電文を構築し、サブネット内通信処理部 3 1 9 a を介してサブネット A 2 1 上に送信する。この時の電文の内容としては、例えばルータ機能の保持するネット番号を要求する電文がある。この要求を受け取ったルータ装置 3 2 は、ルータ装置 3 1 のサブネット内通信処理部 3 1 9 a に相当するサブネット内通信処理部を介して受信電文解析処理を行い、サブネット識別符号情報の通知を行う。ルータ装置 3 2 におけるサブネット識別符号情報通知手段は、本発明によるルータ装置 3 1 のサブネット識別符号情報通知手段 3 1 5 a と同じ手段でよい。このサブネット識別符号情報通知手段は、ルータ装置 3 2 内部にもつ、サブネット識別符号情報保持部 3 1 3 と同様の、サブネット識別符号情報保持部から自身のサブネット A のネット番号を読み出し通知することとなる。このサブネット番号をルータ装置 3 1 が受け取った場合、サブネット内通信処理部 3 1 9 a から受信電文解析処理部 3 1 7 a を介してサブネット識別符号情報確認手段 3 1 5 a に電文が渡される。サブネット識別符号情報確認手段 3 1 5 a においては、受け取った他のルータ装置からの電文内のサブネットの識別番号ネット番号情報を、自身のサブネット A 側のネット番号としてサブネット識別符号情報保持部 3 1 3 のサブネット A ネット番号 4 3 の値を置き換える。

【 0 0 4 7 】

これにより、物理的な構成に変更が無い場合には、ルータの置き換え或いは再起動が行われた際に、以前のサブネットの識別子情報にて立ち上げ処理ができることになり、ルータの置き換え、或いはリセット時に、機器のサブネットの識別子情報が毎回書き換わるということを防げる。

【 0 0 4 8 】

前記実施の形態においては、もしルータ装置がサブネット上に存在しない場合

には、応答が返ってこず、サブネットAのネット番号43を取得することができない。特にルータ装置31を完全に置き換えた時、或いは何らかのか原因で保持されていた情報も含めてリセットがかかった時は、通信そのものを行うことが出来なくなる可能性が高い。そこで、本願発明のサブネット識別符号情報確認手段316a, bでは、ルータ立ち上げ処理部310に対して、ルータ機器以外のネットワーク機器からサブネット識別符号情報を取得するように通知する。この構成は一例であり、この通知は、直接サブネット識別符号情報請求手段314a, 314bへ対して行うように構成してもよい。

【0049】

ルータ立ち上げ処理部310或いはサブネット識別符号情報確認手段316aはサブネットA内での通信を確立するため、必要に応じまず自身の機器番号を仮設定する。仮設定であるため、サブネット内に存在し得る最低値または最大値など、他の機器と出来る限り重複しない値を設定する。これによりサブネットA内では、通信が可能になる。

【0050】

次に、サブネット内の他の機器の保持しているネット番号を受け取る様に、サブネットA内に電文を送り、例えば冷蔵庫1、洗濯機2やエアコン3等のネット番号、機器番号他の情報を、順次送られて来た順番に、サブネット内通信手段319a、受信電文解析処理部317a、サブネット識別符号確認手段316を経由して取り出す。このことにより、従来正常に動作していたルータ装置31自身が接続されているサブネットAのネット番号が確認できる。ここで、ルータ装置以外にもリセットが掛けられている可能性もあることから、次の優先処理を行う。上記方法で入手した複数のネット番号が、コントローラ11（親ルータ装置）やルータ装置を含む場合は親ルータ装置からのネット番号を優先する、親ルータ装置やルータ装置を含み、複数のネット番号で同じネット番号、例えば01が2以上あり、03が1の場合は01を、当該ルータ装置31のネット番号と指定認識し、サブネット識別符号情報保持部313のサブネットAに関する保持手段に保持する動作を行う。親ルータ装置やルータ装置を含まない場合は、ネット番号が複数あり同じネット番号値が多い方を採用し、同様にサブネット識別符号情報

保持部 3 1 3 のサブネット A に関する保持手段に保持する動作を行う。

【 0 0 5 1 】

上記の方法により、サブネット A 内の通信は完全に動作することとなるが、ルータ装置自身のルータ番号や、機器番号は仮の状態である。そのためサブネット A 内の状態を完全に元に戻すためには、親ルータ装置や他のルータ装置が存在する場合は親ルータ装置や他のルータ装置からの全ルータ情報を入手し、先に入手、解析したネット番号を用いて、ルータ装置 3 1 自身の機器番号と、ルータ番号を再設定する。親ルータ装置が存在する場合は特別な場合であるため、一般的なサブネットの場合として親ルータ装置がサブネット内に存在しない場合を以下に説明する。先に入手した、サブネット A 内の各機器の機器番号値を解析した結果より、不連続になっている機器番号を見つける。機器番号 0 2, 0 3, 0 4 がある場合は 0 1 を仮にルータ装置自身の機器番号として第 2 回目の仮設定を行う。機器番号 0 1, 0 2, 0 4 が存在する場合は、0 3 をルータ装置自身の機器番号として第 2 回目の仮設定を行いサブネット識別符号情報保持手段 3 1 3 のサブネット A に関する保持手段に保持する動作を行う。

【 0 0 5 2 】

サブネット B 内においても同様の動作を行う、即ちルータ立ち上げ処理部 3 1 0 或いはサブネット識別符号情報確認手段 3 1 6 はサブネット B 内での通信を確立するため、必要に応じて、まず自身の機器番号を仮設定する。仮設定であるため、サブネット内に存在し得る最低値または最大値など、他の機器と出来る限り重複しない値を設定する。このことでサブネット B 内では、通信が可能になる。

【 0 0 5 3 】

次に、サブネット内の他の機器の保持しているネット番号を受け取る様に、サブネット B 内に電文を送り、例えば電話機 1 1、侵入センサー 9 や睡眠センサー 8 等のネット番号、機器番号他の情報を順次送られて来た順番に、サブネット内通信処理部 3 1 9 b、受信電文解析処理部 3 1 7 b、サブネット識別符号確認処理部 3 1 6 で行う。このことにより、従来正常に動作していたルータ装置 3 1 自身が接続されているサブネット B のネット番号が確認できる。ここで、ルータ装置以外にもリセットが掛けられている可能性もあることから、次の優先処理を行

う。上記方法で入手した複数のネット番号が、コントローラ 1 1 を含む場合はコントローラ 1 1 からのネット番号を優先する、コントローラ 1 1 を含み、複数のネット番号で同じネット番号、例えば 0 1 が 2 以上あり、0 3 が 1 の場合は 0 1 を、当該ルータ装置 3 1 のネット番号と指定認識し、サブネット識別符号情報保持部 3 1 3 のサブネット B に関する保持手段に保持する動作を行う。コントローラを含まない場合は、ネット番号が複数あり同じネット番号値が多い方を採用し、同様にサブネット識別符号情報保持部 3 1 3 のサブネット B に関する保持手段に保持する動作を行う。

【 0 0 5 4 】

上記の方法により、サブネット B 内の通信は完全に動作することとなるが、ルータ装置自身のルータ番号や、機器番号は仮の状態である。そのためサブネット B 内の状態を完全に元に戻すためには、親ルータ装置がサブネット A の代わりに B に存在する場合は親ルータ装置からの全ルータ情報を入手し、先に入手、解析した機器番号を用いて、ルータ装置 3 1 自身の機器番号を、ルータ番号を再設定する。親ルータ装置が存在する場合は特別な場合であるため、一般的なサブネットの場合として親ルータ装置がサブネット内に存在しない場合を以下に説明する。先に入手した、サブネット B 内の各機器の機器番号値を解析した結果より、不連続になっている機器番号を見つける。機器番号 0 2、0 3、0 4 がある場合は 0 1 を仮にルータ装置自身の機器番号として第 2 回目の仮設定を行う。機器番号 0 1、0 2、0 4 が存在する場合は、0 3 をルータ装置自身の機器番号として第 2 回目の仮設定を行いサブネット識別符号情報保持部 3 1 3 のサブネット B に関する保持手段に保持する動作を行う。

【 0 0 5 5 】

以上により、ルータ装置 3 1 は、サブネット A、B 両側のサブネット上の各機器と通信することが可能になり、サブネット A、B 間のルーティングを行えるように成り、サブネット A、B がその両方をつなげた形で機能するようになった。

【 0 0 5 6 】

なお、サブネット A、B は、同種のネットワークでもよいし、異種のネットワークでもよい。サブネット A 内部、B 内部の通信は、上記説明した本発明が関わ

る通信体系の下位に位置するもので、それぞれ、独自の通信プロトコル、アドレス体系を有した閉じたものである。上記説明において、この下位の通信は、確立されており、サブネット内通信処理部 3 1 9 a、b が、下位の通信を行うものであることは言うまでもない。

【 0 0 5 7 】

次に、上記実施の形態において説明した、ネット番号や機器番号を、当該ルータ装置が、親ルータ装置、他のルータ装置、各ネットワーク機器に問い合わせ、分からなくなったネット番号や機器番号を回復するための、問い合わせや、返答を行う通信の方法について、更に詳しく説明する。

【 0 0 5 8 】

図 6 に、通信電文のプロトコルの一例を示す。既に説明したように、本発明に関わる複数のサブネット全体の、親ルータ装置、ルータ装置、ネットワーク機器は、ネット番号と機器番号の組み、即ち、サブネット識別符号情報によって、一意にアドレスが決まる。ネット番号と機器番号の組をネットアドレスと呼ぶこともある。これを図 6 (A) に示す。

【 0 0 5 9 】

図 6 (B) は電文のプロトコルの構成例である。PR は優先コード、SA は自己アドレス、DA は相手アドレス、CC は制御コード、BC は電文長コード、DATA は本発明のネットワークに関わる電文格納エリア、FCC はフレームチェックコードである。PR、SA、DA、CC、BC、DATA、FCC は、各サブネット内に閉じたネットワークフォーマット系で用いられる各サブネットによって決まる電文構成である。従って、自己アドレス SA、相手アドレス DA は、各サブネットの個々の中だけで決まるアドレスである。

【 0 0 6 0 】

本発明のネットワークに関する電文は、DATA エリアに格納される。DATA エリアには、ヘッダ HD、送信元ネットアドレス SNA、受信先ネットアドレス DNA、オブジェクト電文 ODATA が格納される。オブジェクト電文 ODATA エリアには、オブジェクト電文ヘッダ OHD、送信元オブジェクト指定 SOJ、受信先オブジェクト指定 DOJ、オブジェクトプロパティコード OPC、オ

プロジェクトサービスコードOSV、オブジェクトデータ値ODTなどが格納される。

【0061】

本発明においては、SNAには、送信元の装置のネット番号と機器番号よりなるサブネット識別符号情報（或いはネットアドレス）が、DNAには、受信先の装置のネット番号と機器番号よりなるサブネット識別符号情報が、それぞれ格納される。サブネット識別符号情報の送付要求や送付通知など意味するコードは、オブジェクトサービスコードOSVに格納される。送付通知におけるサブネット識別符号情報の値は、オブジェクトデータ値ODTエリアに格納される。

【0062】

ルータ装置の構成については、図3で説明した。図7は、各ネットワーク機器の構成例である。図7において、713は、ネットワーク機器に与えられているサブネット識別符号情報を保持する自己機器サブネット識別符号情報保持部、715は他のルータ装置などからサブネット識別符号情報を要求された際に、機器自身の持つサブネット識別符号情報を通知処理するサブネット識別符号情報通知手段、716は、図3のルータ装置のサブネット識別符号情報請求手段314a、314bにより請求された情報の内容を確認するサブネット識別符号情報確認手段、717は、受信電文の解析を行い所定の手段に受け渡し処理を行う受信電文解析処理部、718は、受信電文に従って、ネットワーク機器自身の機能を実行する機器機能処理部、719は、サブネット内に閉じたサブネット上の通信処理を行うサブネット内通信処理部である。

【0063】

次に、当該ルータ装置が、ネット番号を入手する動作および処理手順について説明する。図8（A）は、ネット番号を確定するためのフローチャートである。

【0064】

当該ルータ装置は、立ち上がった時には、図4に示した自己のサブネット識別符号情報が分かっているとは限らない。そこで、サブネットA上に、サブネット識別符号情報の内のネット番号を問い合わせ、請求する。サブネット識別符号情報請求手段314aは、電文を作成する。送信元SNAは、サブネット識別符号

情報保持部 313 に保持しているサブネット A ネット番号 43 とする。サブネット A ネット番号 43 は、正しい値とは限らない。機器番号は、他の機器に割り当てられていない可能性の高い最大値などの、仮の値とする。当該ルータ装置に D I P スイッチなどで予め設定されているか、再起動前に取得し保持していた値を仮の値としてもよい。受信先 D N A は、適当な値とする。H D は、一斉同報通信の識別子とする。オブジェクトサービスコード O S V は、サブネット識別符号情報請求を示す識別子とする。オブジェクトデータ値 O D T には、何も入れない。図 6 の電文構成におけるその他のエリアの説明は、本実施の形態に直接関係がないので省く。

【0065】

H D、S N A、D N A、O D A T A を、サブネット内通信処理部 319 a に渡す。サブネット内通信処理部 319 a は、一斉同報通信であるので、P R に同報を指定するコードを付与し、D A に一斉同報通信用のアドレスを付け、H D、S N A、D N A、O D A T A を D A T A エリアに格納して、サブネット A 上に送出する。以上の処理を図 8 (A) のステップ (S11) で行う。

【0066】

なお、サブネット A 内では、当該ルータ装置の立ち上げ直後に、当該ルータ装置のサブネット A 上での S A や D A に用いる自己アドレスは、確定しているものとしてよい。従って、S A、D A は、正しい運用ができる状態にある。

【0067】

サブネット A 上には、親ルータ装置、別のルータ装置、ネットワーク機器などがあり、各装置、機器は、それぞれのサブネット内通信処理部において、電文を受信する。図 7 のネットワーク機器が受信した場合で説明する。なお、親ルータ装置、一般のルータ装置が受信した場合も同様の動作を行う。

【0068】

サブネット内通信処理部 719 は、受信電文が一斉同報通信であるので、電文を受信電文解析処理部 717 に渡す。受信電文解析処理部 717 は、D N A をサブネット識別符号情報確認手段 716 に渡し、サブネット識別符号情報確認手段 716 は、自己機器サブネット識別符号情報保持部 713 に格納してある自己の

サブネット識別符号情報と受信したDNAとを比較し調べる。DNA内のネット番号が、自己のサブネット識別符号情報のネット番号と一致していれば、特段の問題はないが、一般的には、異なる。そこで、受信電文解析処理部717は、OSVを調べ、受信電文がサブネット識別符号情報請求であることを解析する。そこで、電文を破棄せずに、請求に対して応え、返信電文を作成する。

【0069】

尚、電文を受信したネットワーク機器は、受信電文のホップ数とネット番号を確認し、ホップ数が0であるにも関わらず送信元のネット番号が自己のネット番号の値と異なる場合は受信電文を破棄する状態を生じることもある。この場合、ルータ装置は、サブネットのネット番号を取得要求する電文に対するネット番号をインクリメントし、ネットワーク機器が受信可能なネット番号になるまで送信を繰り返すこととする。

【0070】

また、ネット番号の不一致に関わらずネットワーク機器が電文を破棄しない特殊コードを定めて電文に付加しても良い。

【0071】

受信電文解析処理部717は、サブネット識別符号情報通知手段715に指令して、返信電文を作成させる。SNAは、自己機器サブネット識別符号情報保持部713にある自己のサブネット識別符号情報とする。DNAは、受信した電文内のSNAとする。OSVは、サブネット識別符号情報請求に対する回答であることを示す識別子とする。ODTには、自己のサブネット識別符号情報を書き込む。サブネット識別符号情報通知手段715は、HD、SNA、DNA、ODATAを、サブネット内通信処理部719に渡す。サブネット内通信処理部719は、先ほどの受信電文のSA、DAが分かっているので、返信電文では、SAとDAを入れ替え、HD、SNA、DNA、ODATAをDATAエリアに搭載して送出する。以上の処理を図8(A)のステップ(S12)において行う。

【0072】

当該ルータ装置のサブネット内通信処理部319aは、サブネットA上の電文を監視しており、DAが、自己アドレスと一致する電文を取り込む。返信電文を

取り込むと、DATAエリアの内容を受信電文解析処理部317aに渡す。受信電文解析処理部317aは、DNAをサブネット識別符号情報確認手段316aに渡し、上記サブネット識別符号情報請求電文に使用したSNA、または、サブネット識別符号情報保持部313内に格納してあるサブネット識別符号情報のサブネットAネット番号43と比較して自身宛ての電文であることを確認し、受信電文解析処理部317aにおいて、OSVがサブネット識別符号情報請求に対する回答であることを解析し、ODTからネットワーク機器のサブネット識別符号情報を取り出し、サブネット識別符号情報確認手段316aに一時保有しておく。以上の処理を図8(A)のステップ(S13)で行う。

【0073】

当該ルータ装置が、送出した、サブネット識別符号情報請求電文は一斉通報通信電文であるので、サブネットA上の他の機器（親ルータ装置、他のルータ装置が存在する場合は、これらも含む。）も受信し、それぞれが、サブネット識別符号情報を返信してくる。

【0074】

そこで、当該ルータ装置は、それらのサブネット識別符号情報も、上記と同様の動作により、サブネット識別符号情報確認手段316に一時保有する。この処理も図8(A)のステップ(S13)で行う。

【0075】

複数のサブネット識別符号情報を得た当該ルータ装置は、一時保有している複数のサブネット識別符号から、既に説明したように、親ルータ装置、ルータ装置、ネットワーク機器の順に優先度をつけて、ひとつのサブネット識別符号情報を選択し、その中のネット番号を、サブネット識別符号情報保持部313に格納する。或いは、複数のネット番号から多数決で選択してもよい。なお、サブネットのネット番号を付与していない状態を示す、デフォルト値のようなネット番号は除いて選択する。また、当該ルータ装置が予め保持していたネット番号が含まれていた場合は、そのネット番号を選択してもよい。以上の動作により、当該ルータ装置は、サブネットAの割り振られて使用中のネット番号を、使用することが可能になった。以上の処理を図8(A)のステップ(S14)で行う。

【 0 0 7 6 】

次に、サブネット識別符号情報確認手段 3 1 6 a は、サブネット A 上の各機器から受取り一時保有しているサブネット識別符号情報から、機器番号を調べ、使われていない機器番号を、サブネット識別符号情報保持部 3 1 3 のサブネット A 内機器番号 4 4 として書き込む。既に説明したように、機器番号の並びに抜けがある場合は、その抜けている番号にするなどである。先に使用した仮の機器番号は、他の機器番号と重複する恐れが皆無ではなかったが、これで重複の恐れが無くなった。

【 0 0 7 7 】

上記説明は、ネット番号と機器番号とを、同時に入手する処理であった。図 8 (B) に示すフローチャートのように、当該ルータ装置が、機器番号を、改めて親ルータ装置、他のルータ装置、各ネットワーク機器に対して、ステップ (S 2 1) において請求し、ステップ (S 2 2)、ステップ (S 2 3) を経て、ステップ (S 2 4) において、入手した複数の機器番号以外の機器番号を選んで格納するようにしてもよい。この方式では、機器番号の請求と返信を示す O S V 用の識別子を定義して用いるようにすればよい。

【 0 0 7 8 】

当該ルータ装置は、サブネット B 上の機器やルータ装置に対しても、同様の動作を行い、サブネット B のネット番号と、重複のない機器番号を得ることができる。

【 0 0 7 9 】

当該ルータ装置は、親ルータ装置や他のルータ装置がそれぞれの親ルータ情報保持部に保有している、図 5 の親ルータ情報、即ち、親ルータ装置自身のサブネット識別符号情報を請求する電文を作成し、上記と同種の手順で、親ルータ情報を入手し、親ルータ情報保持部 3 1 2 に格納することができる。このためには、親ルータ情報請求と、回答用の識別子を O S V 用に設けておけばよい。

【 0 0 8 0 】

次に、当該ルータ装置を交換や再立ち上げる以前に、当該ルータ装置に割り当てられていた、サブネット A と B 上の機器番号に戻す動作、処理手順について

説明する。図 9 に、処理手順のフローチャートを示す。

【 0 0 8 1 】

親ルータ端末装置や他のルータ装置のそれぞれが備えている、全ルータ情報保持部には、当該ルータ装置にそれまで割り振られていたルータ識別子、ネット番号と機器番号が、図 4 のサブネット識別符号情報の形で保有されている。当該ルータ装置は、親ルータ装置や一般ルータ装置に対して、当該ルータ装置の機器番号とルータ識別子とを請求する識別子を O S V とし、上記動作により得たサブネット A と B のネット番号を O D T に格納し、上記動作により得たネット番号と機器番号を S N A として、サブネット A、B 或いは両方に、一斉同報通信電文として発信する。以上の処理を図 9 のステップ (S 3 1) で行う。

【 0 0 8 2 】

サブネット A、B 上にある親もしくは一般ルータ装置は、この電文の O S V が、ルータ装置の機器番号とルータ識別子とを請求する識別子であることを解析し、O D T 内のサブネット A、B のネット番号を取り出し、これらを組としてもつルータを、全ルータ情報保持部の各ルータのサブネット識別符号情報を検索して探し出し、そのルータ識別子、サブネット A 内機器番号、サブネット B 内機器番号を、当該ルータ装置宛てに、返信する。返信の際には、O S V としては、O D T がルータのサブネット識別符号情報であることを示す識別子を使えばよい。また、この時の返信電文の D N A としては、当該ルータ装置からの電文の D N A にある、先に獲得したネット番号と、未使用の値から選択した機器番号とにすればよく、返信電文は一斉同報電文でなくともよいので、当該ルータ装置にだけに届けることができる。以上の処理を図 9 のステップ (S 3 2) で行う。

【 0 0 8 3 】

当該ルータ装置は、受信した上記返信電文の O S V より、先の請求に対する返信であることを、受信電文解析処理部 3 1 7 a、または、3 1 7 b において解析、認識し、サブネット識別符号情報確認手段 3 1 6 a、または、3 1 6 b において、O D T 内の機器番号を取り出し、サブネット識別符号情報保持部 3 1 3、全ルータ情報保持部 3 1 1 に格納する。以上の処理を図 9 のステップ、(S 3 3)、(S 3 4) で行う。

【0084】

以上により、サブネットAとBの機器番号が、当該ルータ装置を交換する前、或いは、再立ち上げる前の状態に戻ったことになる。よって、当該ルータ装置は、ルーティング処理を行うように、立ち上がってよいことになった。

【0085】

なお、上記のサブネット識別符号情報取得過程において、全ルータ情報の中に、当該ルータ装置が結合する2つのサブネットと同じサブネットを結合しているルータ装置が存在することを示すサブネット識別符号情報が含まれている場合、親ルータまたは一般ルータ装置は、当該ルータ装置に、別のルータ装置が既にサブネットAとBを結合していることを知らせ、ルータ装置としてでなく他のネットワーク機器として起動するようにさせる。これは、複数のルータ装置を介して、ループ経路ができるのを防止するためである。

【0086】

全ルータ情報の内容の解析を、上記のように、受信先の親ルータ装置や他のルータ装置で行わない方法でもよい。即ち、親ルータ装置や他のルータ装置に対して、全ルータ情報の送信を請求し、当該ルータ装置が、入手した全ルータ情報を解析検索して、以前に自己に割り振られていた機器番号を検出し、ループ経路の有無をチェックするようにする。このための識別子を必要に応じて設ければよい。請求電文、返信電文は、上記と同様の考え方で作成することができるので、詳しい説明は省く。

【0087】

なお、上記のサブネット識別符号情報取得過程において、他のルータから取り寄せた全ルータ情報のサブネット識別符号情報の少なくともひとつの中に、或いは、取り寄せたサブネット識別符号情報を総合して調べた結果、当該ルータ装置が結合する2つのサブネットと同じサブネットを結合しているルータ装置が存在することを示すサブネット識別符号情報が含まれている場合、当該ルータ装置は、ルータ装置としてでなく他のネットワーク機器として起動させる。これは、複数のルータ装置を介して、ループ経路ができるのを防止するためである。

【0088】

次に、異常処理との関係について、説明する。本発明が解決しようとする課題において説明したように、他のサブネット上の機器に宛てた電文が誤って到達した場合、この電文を実行すると、実行内容によっては、当サブネット内を乱してしまう恐れがある。より具体的に説明する。ヘッダHD内に、サブネット経由回数を示すホップ数データが、例えば、3ビット用意されているものとする。最初、ホップ数データは、0である。ルータを経由して隣のサブネットに移るたびに、1だけ加えられる。正常な状態では、受信電文の送信元サブネット識別符号SNA内のネット番号が受信機器、装置自身のネット番号と一致している場合は、ホップ数データは、0でなければならない。受信電文の送信元サブネット識別符号SNA内のネット番号が自己のネット番号と一致しておらず、ホップ数データが0である場合は、異常状態と判断し、一般的には、受信電文を廃棄する。

【0089】

当該ルータ装置が、上記のように、他のルータ装置やネットワーク機器に、ネット番号を請求する場合は、そのサブネットの現在のネット番号と異なるネット番号をSNAに用いてしまうことが多い。上記異常処理の仕組みを使うと、電文が廃棄されて、ネット番号を教えてもらうことができなくなる。そこで、OSVが、ネット番号請求の識別子になっている電文の場合は、廃棄せずに、返信することにしても良い。そして、応答電文内のSNAはネット番号を請求してきたルータ装置の使ったネット番号と同じ値とする。このようにすることにより、ネット番号請求電文を廃棄せずに、返信電文を発信する。当該ルータ装置の方でも、返ってきた受信電文内のSNAのネット番号と、自己のネット番号とが一致し、ホップ数データが0であるので、正常受信となる。

【0090】

なお、上記説明したネット番号請求の一連の動作が、何らかの理由により、達成されない場合は、次のような動作をするようにしてもよい。当該ルータ装置は、ネット番号を請求するサブネット識別符号請求電文のSNA内のネット番号として、その値を順番に変えた電文を、次々送りだす。受信した機器や装置では、自己のネット番号とSNA内のネット番号とが一致しない場合は、上記の異常処理に該当するので、返信電文を作成しない。ネット番号が一致すると、異常処理

されず、当該ルータ装置に、返信電文が返ってくるので、ネット番号を獲得することができる。返信電文のDNAとしては、受信電文のSNAを使用して、当該ルータ装置が、返信電文を受信するようにする。このようにすれば、ネット番号が8ビットの場合には、当該ルータ装置は、最悪256回サブネット識別符号請求電文を送れば、ネット番号を獲得できる。256通りの電文を作って送るようにしてもよいし、返信電文が一定時間以内に返ってこない場合に、次のネット番号に移るようにしてもよい。

【0091】

本発明では、既に説明したように、ネット番号問い合わせの電文に対しては、異常処理がなされないようにしたので、通常は、上記のような多数回のサブネット識別符号請求を行うことなく、速やかにネット番号を確保できる。

【0092】

全ての機器や装置は、受信した電文のSNAのネット番号が、特定の番号、例えば、0×00の場合、自己のネット番号と不一致であっても、受信電文を廃棄しないで、電文内容に従って処理を行うようにしてもよい。電文のOSVがどのようなものであっても、廃棄しないようにしてもよい。或いは、特定のOSVに対してのみ、例えば、本発明の課題のような場合には、サブネット識別符号やネット番号を請求する電文の識別子の場合に、廃棄せずに処理を行うようにしてもよい。

【0093】

また、ネット番号の請求電文に、特殊処理指定を設けておき、この特殊処理指定がある場合は、SNAと自己サブネット識別符号やその中のネット番号との一致を調べずに、或いは、調べた結果が不一致の場合も、ネット番号を返信するようにしてもよい。また、受信電文が、HD、SNA、DNA、OHD、SOJ、DOJ、OPC、OSVを分析して、明らかに自己宛てでない場合を除き、返信するようにしてもよい。

【0094】

ネット番号の請求電文に対する返信電文に、特殊処理指定を設けておき、この特殊処理指定がある場合は、SNAと自己サブネット識別符号やその中のネット

番号との一致を調べずに、或いは、調べた結果が不一致の場合も、受信したネット番号を取り出して格納するようにしてもよい。また、受信電文が、HD、SNA、DNA、OHD、SOJ、DOJ、OPC、OSVを分析して、明らかに自己宛てでない場合を除き、ネット番号を取り出し格納するようにしてもよい。

【0095】

上記説明では、当該ルータ装置からサブネット識別符号のネット番号や機器番号を請求し入手する際の、電文作成処理と電文受信処理の構成と動作や処理手順について説明したが、同様の原理は、ネットワーク機器から、親ルータ装置、ルータ装置、他のネットワーク機器に対して、サブネット識別符号のネット番号や機器番号を請求する場合、特にそれまで使用していた値を請求し、元の状態に復帰する場合に使用してもよい。

【0096】

上記説明のように、ルータ装置が接続された複数のサブネットの一つに接続されるネットワーク機器は、ルータ装置からネット番号を請求された場合は、ルータ装置のサブネット識別符号と自己の保有するサブネット識別符号とが一致しない場合にも、自己の保有するサブネット識別符号の内の少なくともネット番号を返信することになる。一斉同報通信の識別子は、ヘッダHDの中に設ければよい。

【0097】

上記説明では、オブジェクトサービスコードOSVを、相手の保有するサブネット識別符号、ネット番号や機器番号、親ルータ情報、全ルータ情報の請求サービス、或いは、返信するサービスのそれぞれの識別子とした。識別子の決め方は、これに限らない。オブジェクト電文ヘッダOHD、送信元オブジェクト指定SOJ、受信先オブジェクト指定DOJ、オブジェクトプロパティコードOPCのいずれかにおいて、上記の識別を行う機能を持たせるべく、識別子を定義してもよい。また、受信先を、親ルータ装置、ルータ装置、ネットワーク機器のいずれかに区分するための、ルータプロファイル、ノードプロファイルのような、識別子を設けておき、例えば、DOJに記載するようにし、受信した機器や装置は、自己に該当する識別子の電文のみ、取り込むようにすれば、一斉同報通信で請求

電文を送信しても、返信電文の数を減らせるので、通信の輻輳を軽減できる。

【 0 0 9 8 】

また、送信元を、親ルータ装置、ルータ装置、ネットワーク機器のいずれかに区分するための、ルータプロファイル、ノードプロファイルのような、識別子を設けておき、例えば、S O J に記載するようにすれば、その返信電文を受けた機器や装置は、自己のグループに該当する識別子の電文のみ、取り込むようにできるので、返信電文を無駄に処理することを防ぎ、受信機器の負担を減らすことができる。

【 0 0 9 9 】

また、受信先を、親ルータ装置、ルータ装置、ネットワーク機器のいずれかの群に区分する識別子を設けておき、機器や装置は、自己に該当する識別子の電文のみ取り込むようにすれば、次のように効率的に、ネット番号と機器番号の回復が可能になる。即ち、最初に親ルータ装置宛てに全ルータ情報を請求する電文を作成して、一斉同報通信する。親ルータ装置がある場合には、ネット番号、機器番号の親ルータ装置の全ルータ情報から、確保できる可能性がある。親ルータ装置からの返信がない場合は、ルータ装置宛てに全ルータ情報を請求する。入手したひとつ又は複数の、全ルータ情報から、当該ルータ装置のネット番号、機器番号、ルータ識別子を回復する可能性がある。ルータ装置からの返信がなければ、サブネット上には動作中のルータ装置がないので、ネットワーク機器宛てのサブネット識別符号請求の電文を送信する。そして、収集した各ネットワーク機器自身のネット番号と機器番号から、当該ルータ装置のサブネット識別符号を回復することになる。このように順序を踏んで、サブネット識別符号請求を進めれば、一斉同報通信による場合も、返信電文の数を更に減らせるので、通信の輻輳を軽減できる。

【 0 1 0 0 】

また、要求する情報やO D T に格納した情報の種類が、ネット番号か、機器番号か、などを特定する識別子を設けて、例えば、O P C に記載するようにすれば、どの情報を扱う電文であるかの判断ができる。そして、O S V には、情報を請求しているのか、情報を通知しているのか、などの識別子を設ければ、受信先の

機器や装置は、ODTの値に関して、どのような処理をすべきかが分かる。

【0101】

上記当該ルータ装置は、サブネットA、Bの2つのサブネット間をルーティングするものとして説明した。3つ以上のサブネットの間をルーティングするルータ装置の場合は、ルーティングする3つ以上の各サブネットについて、上記と同様の構成を備え、同様の動作を各サブネットに対して行えばよい。図4のルータのサブネット識別符号は、ネット番号と機器番号の組を3つ以上持つものになり、接続サブネット数42は、3以上の値となることは言うまでもない。

【0102】

上記の図3、図7における各手段、処理部は、既に説明したそれぞれの動作を果たす専用の電子回路で構成してもよいし、上記フローチャートとともに説明した処理手順をコンピュータプログラムによって実現してもよいことは言うまでもない。

【0103】

上記のようにして、可能な通信範囲を拡大していき、ルータ装置自身の直接接続されたサブネットA、Bの通信を回復し、親ルータ装置であるコントローラ11または他のルータ装置32（図示せず）との通信を回復し、全ルータ情報を通信により確保し、正確なルータ装置31の置き換え前或いはリセット前の状態に完全復旧することが可能である。このことにより、装置やネットワーク利用者は、煩わしい設定作用を再度行うことなく、ネットワーク機器の重要装置であるルータ装置を性能の良い物に置き換えたり、故障時に以前に使っていた古いルータを一時的に使用したりすることができ、利用者に極めて有利なルータ装置を提供することができるものである。

【0104】

本願発明の装置は、上記の例に限定されることなく、ルータ番号のないものやネット番号と機器番号が分かれて管理されていない場合、或いはネット番号、機器番号以外にID番号設定を必要とするものにも応用できるものである。

【0105】

即ち、サブネット内での通信を確立するためまずルータ自身のネット番号、機

器番号を通信可能な範囲から取得、分析、仮設定後、ルータ自身の仮設定を順次行い、仮設定で通信できる範囲を、順次広げることは本願発明の範囲である。

【0106】

コントローラや他のルータ装置など正確な情報源まで通信可能範囲を同様の手段により広げ、正確な従来情報を得た後、設定を行うことを特徴とするものは、本願に含まれるものである。

【0107】

また、本実施の形態においてルータ装置を用いて説明したが、ネットワーク機器のネット番号と機器番号の付与処理においても適用可能である。例えば、図2のサブネットBに接続された機器1(22a)をサブネットAに接続しなおす等の様に異なるサブネットへネットワーク機器を移動させた場合について、機器1(22a)のネット番号と機器番号の付与を一例として説明する。異なるサブネットに移動させた場合、ネットワーク機器が保持するネット番号と接続先のサブネットのネット番号が異なる状態になる。また機器番号はサブネット毎に一意であれば良いため、機器番号が重複する可能性もある。この様な場合に、機器1(22a)はサブネットAに接続された他機器へ上述したネット番号の問い合わせを適用することで設定すべきネット番号を取得する。また、機器番号はサブネットAに接続された他機器の機器番号を問い合わせることにより未使用の機器番号を取得する。即ち、機器1(22a)は異なるサブネットに移動した場合に、まず自己の機器番号を仮設定する。仮設定する機器番号は、同一サブネット内で他機器が使用しないと想定される値を用いる。次に、自己のネット番号がサブネットAのネット番号に設定される迄、「ネット番号の指定無し」を示すコードを仮設定する。これにより機器1(22a)はサブネットA内では、通信が可能になる。機器1(22a)は、サブネットAの他機器に対してネット番号の問い合わせを行う。他機器から返答されたネット番号を参照し、自己のネット番号を設定する。この場合、ネット番号は他機器から取得したネット番号の多数決により優先度を定め設定しても良い。同様にサブネットAに接続する他機器の機器番号を取得し、重複しない機器番号に自己の機器番号を設定する。尚、この場合、仮設定前の自己が保持していた機器番号が同一サブネット上の他機器で未使用か確認

の問い合わせを行い、他機器が未使用であればそのまま用いても良い。尚、ネット番号を「ネット番号の指定無し」に仮設定するとしたが、ネット番号を一時的に接続された同一サブネット内でのみ通信可能を示すコードにしても良く、またネット番号自体を使用しないとしても良い。ネットワーク機器が自己のネット番号又は機器番号を変更した際に、親ルータ装置やルータ装置に変更情報（変更前のネット番号と機器番号、及び変更後のネット番号と機器番号）を送信し全ルータ情報を更新する。尚、ルータ情報の更新は、変更のあった機器から送信されても良いし、他機器又はルータ装置が移動したネットワーク機器へ送信した際のエラー処理に基づき親ルータ装置又はルータ装置が各サブネット内を調査し自動的に変更すべきネットワーク機器に対するルータ情報の更新を行っても良い。尚、ネットワーク機器が異なるサブネットへの移動した場合のみならず、新たに機器がサブネットに接続した場合も同様に適用可能である。この場合、親ルータ装置がネット番号や機器番号を付与する必要が無く、機器が自己のネット番号と機器番号を自発的に設定可能となり親ルータ装置の処理の負荷を軽減することが可能となる。

【0108】

ネットワーク機器は、受信電文のホップ数が0であり且つ受信電文の送信元のネット番号の値が自分のネットアドレスのネット番号の値と異なる場合に受信電文を破棄するが、ホップ数が0であっても、送信元のネット番号=0x00の設定である電文は、受信先が自分宛であれば廃棄せず受信する。また、ルータ装置は、電文がルータ情報に関する問い合わせであれば、ネット番号が送信元と自身とで異なっても受信し返信する。

【0109】

次に、各機器やルータ装置のネット番号を回復するための別の実施の形態について、説明する。

【0110】

この実施の形態では、各ルータ装置は、その一部分が、マスタールータまたはスレーブルータになり得るものとする。マスタールータとは、サブネット内に複数のルータが存在する場合、親ルータへの経路上にあるルータ（そのサブネット内で

最初に親ルータによってルータ情報を付与されたルータ) が一つ存在することとなり、このルータはそのサブネット内の「マスタールータ」とする。スレーブルータは、マスタールータで無いルータを示す。ルータ用のサブネット識別符号情報として、既に説明したルータ識別子、ネット番号と機器番号に加えて、マスタールータ情報を設ける。マスタールータ情報は、ネット番号とマスタールータで有るか無いかを示す情報から成る。

【 0 1 1 1 】

ルータ装置においては、ルータプロファイルのプロパティに対する読み出し要求に関する電文を受信した場合、ホップ数が0であり且つ受信電文のSNAのネット番号の値がルータの保持しているネット番号の値と異なっても応答を返すものとする。この時の、ルータ装置からの応答電文内のSNAのネット番号の値は、0 x 0 0 とする。

【 0 1 1 2 】

従って、ネット番号、マスタールータ情報、全ルータ等のルータ情報に関する問い合わせであれば、ルータ装置は、電文内の受信先ネット番号が自分のネット番号と異なっても受信することも可能とする。(ルールA) 各機器では、ホップ数が0で、送信元のネット番号が0 x 0 0 の場合には、機器自身のネット番号との不一致に関わらず、自分宛であれば受信することにする。(ルールB)

このようにすれば、例えば、機器が移動して違うサブネットになった場合、ネット番号を付与する方法として、まず、端末はルータ装置にネット番号を問い合わせる。ルータ装置は、(ルールA)により、問い合わせを受信する。ルータ装置からは自分の送信元のネット番号を0 x 0 0 にして端末へネット番号を送信することにより、機器は無事に受け取れる。

【 0 1 1 3 】

なお、ネット番号、機器番号、マスタールータ情報の3つをまとめて、このルータのルータ情報、或いは、サブネット識別符号と呼ぶことにする。さらに、ルータ識別子もルータ情報の1つである。

【 0 1 1 4 】

また、ルータは、ルータ内部においては、親ルータに近い方がスレーブルータ

、遠い方がマスタータになるようにする。一つのルータにおいて、例えばサブネットに3つ以上接続された場合等は、スレーブは一つのみで他はマスターとなる。

【0115】

サブネットに他のルータが存在する場合には、当該ルータ装置は、その立ち上がり処理時に、つながっているサブネット上の各ルータに、マスタールータ情報を問い合わせる。ルータから送信されるマスタールータ情報の中に、「マスタールータ有り」を示すマスタ情報が存在する場合、そのマスタールータで有るマスタールータ情報のネット番号を信用し、含まれるネット番号を、そのサブネットのネット番号として設定する。

【0116】

他ルータは存在するが、マスタールータが無ければ、スレーブルータのみであるので、返答のあったマスタールータ情報内のネット番号は用いず、後述するサブネットに他のルータが存在しない場合、と同様の処理を行う。

【0117】

サブネットに他のルータが存在しない場合（即ち、他のルータ装置からの応答が無い場合）に関してルータ装置の処理を説明する。

【0118】

ルータ装置は、サブネットに接続された全ての機器へネット番号の問い合わせを行う。機器からの応答されたネット番号とルータ自身が保持するネット番号を比較する。親ルータに機器から得たネット番号を使用してよいかどうかの確認の問い合わせを行なう。親ルータが保持する各ルータの情報（全ルータ情報）に基づき、問い合わせのあったネット番号の使用の有無を確認した上で使用許可であることを送信すれば、そのネット番号を使用して設定する。親ルータがネット番号を確認した際に使用を許可しない場合、当該ルータ自身のルータ識別子を0x00として送信する。この場合、問い合わせた当該ルータ装置はルータとして立ち上がらない様にする。

【0119】

尚、この処理は、他にルータが存在しているが、他のルータからの応答を取得

できなかった場合にも適用しても良い。

【0120】

また、ルータ以外の機器に対して行なうネット番号の書き込み要求は、マスタールータのみが行うものとする。マスタールータは、親ルータからの書き込み要求しか受け付けないものとし、親ルータは、他ルータからの書き込み要求は受け付けないものとする。

【0121】

次に、上述したルータ装置の構成と、その構成に基く、ネット番号、機器番号の設定の動作、および、手順について詳しく説明する。手順は、図11、図12のフローチャートも使用しながら説明する。なお、フローチャートにおいて、点線は、次の指示待ちの待機状態または他のタスクの実行を示す。

【0122】

この実施の形態のルータ装置は、マスタールータ部とスレーブルータ部とから構成される。ルータ装置は、既に説明したように、2つ以上のサブネットに結合される。2つのサブネットに対応する場合は、結合されているサブネットの内の、「親ルータに近い」（或いは、「親ルータに向いている」）サブネットに対応する部分が、スレーブルータ部となり、残りの部分はマスタールータ部となる。どの部分がマスタールータ部になるかは、親ルータ装置がどこに位置するか、サブネットがどのように結合されているかなど、全体のネットワークの状況により決まる。例えば、図10に示すネットワーク構成においては、サブネットAとサブネットBを繋ぐルータにおいて、サブネットBから見て、サブネットAには親ルータ装置が接続されており親ルータ装置に向かう方がマスタールータ、親ルータ装置から遠ざかる方をスレーブルータとしても良い。

【0123】

図3に示したルータ装置の構成においては、サブネットAとBの一方の側が、マスタールータ部になる。マスター部かスレーブ部かを識別するために、マスタールータ情報を設ける。図4に示したサブネット識別符号の構成に加えて、各サブネット毎に、サブネットA用マスタールータ情報とサブネットB用マスタールータ情報とを設け、これらを格納するエリアを設ける。即ち、サブネットAネット番号4

3、サブネットA内機器番号44に加えて、サブネットA用のマスタータ情報47を設ける。(図示しない。)また、サブネットBネット番号45、サブネットB内機器番号46に加えて、サブネットB用のマスタータ情報48を設ける。(図示しない。)これらのサブネット識別符号は、サブネット識別符号情報保持部313に格納される。全ルータ情報保持部311は、マスタータ情報を加えたサブネット識別符号を、全ルータ装置について、一覧表などのテーブルとして格納している。親ルータ情報保持部312は、親ルータ装置のネット番号、機器番号に加えて、そのマスタータ情報を含めて、格納している。マスタータ情報は、2つのデータ、即ち、結合されているサブネットのネット番号と、マスタータかスレーブルータかを識別するマスタ識別子コードからなる。

【0124】

マスタータ部になっている側のマスタータ情報のネット番号の値は、結合されているサブネットのネット番号とし、スレーブルータ部になっている側のマスタータ情報のネット番号の値は、例えば、0x00とする。これは、ネット番号としては使用しない値である。一例としてマスタータ情報として2バイトの値を取り、1バイト目としてマスタータかスレーブルータかを示すマスタータ識別子の情報(マスタータ=0x41、スレーブルータ=0x42)、2バイト目としてネット番号の情報を保持すれば良い。

【0125】

図10は、マスタータ部とスレーブルータ部を有するルータ装置を使用して、サブネットA、B、C、Dをネットワーク化した例である。複数のルータ装置が、ループ経路を作らないように構成すると、一般ルータ装置(親ルータ装置以外のルータ)は、親ルータ装置へ向かって、一定の方向を持つことになる。各ルータで見ると、経路上、親ルータ装置に近い方が、スレーブルータ部になり、遠い方がマスタータ部になる。各サブネット内では、そのサブネットに結合される複数のルータ装置の内、1つだけがマスタータ部として結合され、他のルータ装置はスレーブルータ部として結合される。ひとつのサブネット上に、マスタータ部が2つ以上あれば、経路としてループの存在を示すことになる。この場合、マスタータが2以上検出した場合に、ルータ装置を起動しない、又は、異

常であることを検知して休止状態となる等を取り決めることで処理を行っても良い。また、3つ以上のサブネットの間でルーティング処理を行なうルータ装置の場合、そのルータ装置の内部では、スレーブルータ部は1つだけになる。

【0126】

各ルータ装置のマスタルータ部になった方のマスタルータ情報中のネット番号として結合されている各サブネットのネット番号を保持する。図10の例では、各サブネットA、B、C、Dのネット番号である0x01、0x02、0x03、0x04をマスタルータで有るマスタルータ情報のネット番号として保持している。

【0127】

図6に示した電文構成において説明したように、本実施の形態の電文は、DATAエリアに格納される。DATAエリアには、ヘッダHD、送信元ネットアドレスSNA、受信先ネットアドレスDNA、オブジェクト電文ODATAが格納される。オブジェクト電文ODATAエリアには、オブジェクト電文ヘッダOHD、送信元オブジェクト指定SOJ、受信先オブジェクト指定DOJ、オブジェクトプロパティコードOPC、オブジェクトサービスコードOSV、オブジェクトデータ値ODTなどが格納される。

【0128】

受信先オブジェクト指定DOJとして、ルータ情報を扱うことを示すルータプロフィール識別子コード(0xEF101)、ノードのネットアドレスを扱うことを示すノードプロフィール識別子コード(0xEF001)を設ける。

【0129】

オブジェクトプロパティコードOPCとして、マスタルータ情報を扱うことを示すマスタルータ情報プロパティ(0xE6)、ネット番号を扱うことを示すネット番号プロパティ(0xE1)、親ルータ情報を扱うことを示す親ルータ情報プロパティ(0xE3)、全ルータ情報を扱うことを示す全ルータ情報プロパティ(0xE4)、ルータ登録要求であることを示す登録要求ルータプロパティ(0xE7)、自ルータ情報を扱うことを示す自ルータ情報プロパティ(0xE0)、インスタンス変化を扱うことを示すインスタンス変化クラスアナウンスプロ

パティ (0xD5) などを設ける。

【0130】

オブジェクトサービスコードOSVとして、読み出し要求 (0x62)、通知要求 (0x63)、書き込み要求 (0x60)、(0x61)、通知 (0x73) などを設ける。受信先サブネット識別符号DNAとして、サブネット内一斉同報 (0x01FF) を設ける。

【0131】

ルータ装置が、停電などでの休止状態から、サブネットに再接続された場合の、サブネット識別符号の復帰や再登録の動作と手順について図11、図12を用いて説明する。この場合、図10においてサブネットAとサブネットBに接続するルータ装置を一例として説明する。

【0132】

まず、サブネット内一斉同報で、サブネットA、B上の親ルータを含めた全ルータ装置に、マスタールータ情報を読み出し通知してもらうために、電文(1)をサブネットA、Bに送信する。電文(1)においては、SNAに、保持している自サブネット識別符号の値を設定し、DNAでサブネット内一斉同報を指定し、DOJでルータプロファイルオブジェクト (0xEF101) を指定し、OPCでマスタールータ情報プロパティ (0xE6) を指定し、OSVで読み出し要求 (0x62) を指定する。ODTには何を書き込んでもよい。

【0133】

サブネットA、B上に他のルータ装置があれば、それらのルータ装置は、電文(2)によって、マスタールータ情報の読み出し応答を返信応答してくる。電文(2)では、SNAには、保持している自サブネット識別符号の値を設定し、DNAに電文(1)のSNAを設定し、DOJでルータプロファイルオブジェクト (0xEF101) を指定し、OPCでマスタールータ情報プロパティ (0xE6) を指定し、OSVで通知 (0x73) を指定する。ODTにはマスタールータ情報を格納する。

【0134】

ステップ(S41)において、電文(2)を受信、解析して収集したマスター

ータ情報を調べる。スレーブルータ指定でないマスターータ情報を2つ以上受信した場合は、ネットワークにループが存在するか、その可能性があり、ネットワーク機器として起動するか、待機状態とし、ルータ機能を起動しない。マスターータが、1または0の場合は、次の手順に移る。ステップ（S41）の内部フローチャートを、図12（A）に示す。

【0135】

なお、図12（C）のように、マスターータ数が0の場合は、ルータ機能を一切立ち上げないようにしてもよいが、この例については、後述する。

【0136】

電文（2）の返信がない場合は、ルータ装置が存在しないので、ネットワーク機器として起動するか、待機状態とする。

【0137】

サブネット内のマスターータが0であることが確認されると、ネット番号の回復動作手順に入る。当該ルータ装置は、サブネットA、B内に存在する全機器に向けて、保有しているネット番号を、電文（3）により、問い合わせる。電文（3）では、SNAとして、自身が保持している自サブネット識別符号のネット番号部を0x00とした値とし、DNAでサブネット内一斉同報を指定し、DOJでノードプロファイルオブジェクト（0xEF001）を指定し、OPCでネット番号プロパティ（0xE1）を指定し、OSVで読み出し要求（0x62）を指定する。

【0138】

サブネットA、B上の各機器は、電文（3）のホップ数が0、SNAのネット番号が、0x00であるので、受信し、要求に応答して、自己の保有しているネット番号を、電文（4）により返信通知する。電文（4）のSNAを、機器自身のサブネット識別符号とし、DNAは、電文（3）のSNA、DOJはノードプロファイルオブジェクト（0xEF001）、OPCはネット番号プロパティ（0xE1）、OSVは読み出し応答（0x72）とし、ODTは、ネット番号とする。機器番号も含めたサブネット識別符号でもよい。

【0139】

ステップ (S42) において、マスタータの数が0の場合で、電文 (4) より収集したサブネット識別符号と、保持しているサブネット構成とを比較し、確認したサブネット構成が異なる場合には、ルータ機能を起動しない。

【0140】

マスタータの数が0の場合で、保持しているサブネット構成と確認したサブネット構成が同じ場合、保持している情報でルータとして起動する。

【0141】

一方、マスタータが1つの場合は、当該ルータ装置は、後述する電文 (5)、(6)、電文 (7)、(8) により、マスタータとやり取りし、親ルータ情報と全ルータ情報を獲得する。なお、マスタータは、親ルータである場合もある。

【0142】

まず、電文 (5) において、SNAとして、保有しているサブネット識別符号または、そのうちのネット番号を0x00としたものとし、DNAで電文 (2) で獲得したマスタータを指定、DOJでルータプロファイルオブジェクト (0x0EF101) を指定、OPCで親ルータサブネット識別符号プロパティ (0xE3) を指定、OSVで読出し要求 (0x62) 指定する。

【0143】

マスタータは、電文 (5) を受信、解析し、電文 (6) を作成し返信する。電文 (6) において、SNAを自己のサブネット識別符号、DNAを電文 (5) のSNA、DOJをルータプロファイルオブジェクト (0x0EF101)、OPCを親ルータサブネット識別符号プロパティ (0xE3)、OSVを読み出し応答 (0x72) 指定とし、ODTに親ルータ情報を格納する。

【0144】

電文 (7) では、SNAとして、保有しているサブネット識別符号または、そのうちのネット番号を0x00としたものとし、DNAでマスタータを指定、DOJでルータプロファイルオブジェクト (0x0EF101) を指定、OPCで全ルータ情報プロパティ (0xE4) を指定、OSVで読出し要求 (0x62) 指定する。

【0145】

マスタールータは、電文（7）を受信、解析し、電文（8）を作成し返信する。電文（8）において、SNAを自己のサブネット識別符号、DNAを電文（7）のSNA、DOJをルータプロファイルオブジェクト（0x0EF101）、OPCで全ルータ情報プロパティ（0xE4）を指定、OSVを読み出し応答（0x72）指定とし、ODTに全ルータ情報を格納する。

【0146】

当該ルータ装置は、ステップ（S43）において、電文（6）、（8）を解析し、親ルータ情報と全ルータ情報を獲得する。全ルータ情報の中に、サブネットA、Bを結合するルータ装置、即ち、当該ルータ装置のサブネット識別符号が含まれている場合、そのサブネット識別符号を当該ルータ装置に採用し、ルータ機能を立ち上げる。当該ルータ装置のサブネット識別符号が含まれているかどうかは、電文（4）、または、電文（2）、（4）により得たサブネットA、Bのネット番号と、全ルータ情報とにより、判定することができる。

【0147】

親ルータが存在しない場合には、マスタールータから全ルータ情報を取得し、その情報と当該ルータ装置自身が保持していた情報、及び、ステップ（S42）におけるサブネット構成の確認で把握した構成が一致した場合には、保持している情報でルータとして起動する。以降のシーケンスは不要となる。3つが一致しない場合には、ルータ機能は起動しない。以降のシーケンス処理は不要であり、当該ルータ装置は、ネットワーク機器として立ち上げるか、待機状態とする。

【0148】

マスタールータが0、即ち、マスタールータがサブネットA、Bにない場合、或いは、マスタールータが0で、ステップ（S42）において、当該ルータ装置が保持しているサブネット構成と、全機器のノードから収集したサブネット識別符号に基づくサブネットA、Bの構成とが不一致の場合のように、サブネットA、Bの構成が分からないか、不確かな場合は、当該ルータ装置は、親ルータ装置のサブネット識別符号が分かる場合は、親ルータ装置に、ルータの登録を要求する。このために、後述する電文（9）、（10）、（11）、（12）、（13）を親ル

ータ装置との間でやり取りする。

【 0 1 4 9 】

電文 (9) において、 S N A でマスターータ部が有るサブネット A 側のサブネット識別符号の値を設定し、 D N A で、電文 (6) で得た親ルータ情報により親ルータを指定し、 D O J でルータプロファイルオブジェクト (0 x 0 E F 1 0 1) を指定し、 O P C で登録要求ルータプロパティ (0 x E 7) を指定し、 O S V で書き込み要求 (0 x 6 0) 指定する。

【 0 1 5 0 】

親ルータ装置は、登録要求を検討し、全ルータ情報を調べて、ループ経路などの矛盾がないことを確認し、当該ルータ装置用のルータ識別子、ネット番号、機器番号、マスターータ情報を、割り当て、電文 (1 0) により、当該ルータ装置に通知し、サブネット識別符号情報保持部 3 1 3 に書き込むように要求する。

【 0 1 5 1 】

このために、電文 (1 0) において、 S N A を親ルータ自身のサブネット識別符号とし、 D N A を電文 (9) の S N A とし、 D O J をルータプロファイルオブジェクト (0 x 0 E F 1 0 1) とし、 O P C を自ルータ情報プロパティ (0 x E 0) とし、 O S V で書き込み要求 (0 x 6 1) 指定し、 O D T に当該ルータ装置用のサブネット識別符号、即ち、ルータ識別子、ネット番号、機器番号、マスターータ情報を格納する。

【 0 1 5 2 】

当該ルータ装置は、電文 (1 0) を受信、解析し、割り当てられたルータ識別子、ネット番号、機器番号、マスターータ情報を、サブネット識別符号情報保持部 3 1 3 に格納し、電文 (1 1) により、格納した旨を、親ルータ装置に通知する。

【 0 1 5 3 】

このために、電文 (1 1) においては、 S N A を割り当てられたサブネット識別符号とし、 D N A を親ルータ装置のサブネット識別符号とし、 D O J をルータプロファイルオブジェクト (0 x 0 E F 1 0 1) とし、 O P C を自ルータ情報プロパティ (0 x E 0) とし、 O S V で通知 (0 x 7 3) に指定し、 O D T を空に

する。

【0154】

親ルータ装置は、電文（11）を受信すると、電文（12）で、全ルータ情報を当該ルータ装置に送信する。

【0155】

このために、電文（12）では、SNAを親ルータ装置のサブネット識別符号とし、DNAを当該ルータ装置に割り当てたサブネット識別符号とし、DOJでルータプロファイルオブジェクト（0xEF101）を指定し、OPCで全ルータ情報プロパティ（0xE4）を指定し、OSVで書き込み要求（0x61）を指定し、ODTに全ルータ情報を格納する。

【0156】

当該ルータ装置は、電文（12）を受信、解析し、全ルータ情報を全ルータ情報保持部31.1に格納し、電文（13）により、格納した旨を、親ルータ装置に通知する。

【0157】

このために、電文（13）においては、SNAを割り当てられたサブネット識別符号とし、DNAを親ルータ装置のサブネット識別符号とし、DOJをルータプロファイルオブジェクト（0xEF101）とし、OPCを全ルータ情報プロパティ（0xE4）とし、OSVで書き込み応答（0x71）に指定し、ODTを空にする。

【0158】

以上により、ステップ（S44）において、当該ルータ装置は、ルータ情報が確保された。

【0159】

当該ルータ装置は、割り当てられたネット番号を、サブネットA、Bのうちマスタになった側の上の各機器に書き込ませるために、電文（14）を送信する。

【0160】

このために、電文（14）において、SNAでサブネットAまたはBの側のサブネット識別符号の値を設定し、DNAでサブネット内一斉通報（0x01FF

）を指定し、DOJでノードプロファイルオブジェクト（0x0EF001）を指定し、OPCでネット番号プロパティ（0xE1）を指定し、OSVで書き込み要求（0x60）指定し、ODTにネット番号を格納する。

【0161】

また、電文（15）により、サブネットA、B両方に状態変化の通知を行なう。即ち、電文（15）において、SNAでサブネットA側、または、サブネットB側サブネット識別符号の値を設定し、DNAでドメイン内一斉同報を指定し、DOJでノードプロファイルオブジェクト（0x0EF101）を指定し、OPCで構成に変化の有ったことを通知するインスタンス変化クラスアナウンスプロパティ（0xD5）を指定し、OSVで通知（0x73）指定し、ODTには、保持するインスタンス情報を格納する。

【0162】

以上により、ルータとして立ち上げ、通常の動作が開始できる。

【0163】

上記説明では、図12（A）、（B）のとおり、マスタルータ数が1つの場合も、電文（3）、（4）により、サブネット上の各機器が保有するネット番号を収集するようにしたが、マスタルータが1つあれば、その保有する全ルータ情報と親ルータ情報から、当該ルータ装置のネット番号をサブネットA、Bについて、知ることができるので、この場合は、電文（3）、（4）の処理は省略してもよい。

【0164】

尚、マスタルータを示すマスタルータ情報の応答があった場合は、マスタルータ情報が保持するネット番号を信用し、ルータ装置のネット番号に設定することでネット番号設定における他の処理を省略しても良い。

【0165】

また、上記説明では、マスタルータ数が0個の場合、図12（B）のように、サブネット構成が収集分と自己保有分とで一致したときは、保有情報でルータ機能を立ち上げるようにし、異なる場合はルータ機能を起動せず、機器として立ちあげても良い。この場合、ルータ機能停止となるため、なんらかの異常通知をル

ータに行っても良い。

【0166】

また、図12(C)に示したように、マスターータ数が0個の場合は、ステップ(S41)において、ルータの起動を行なわないようにしてもよい。

【0167】

即ち、収集したマスターータ情報が全てスレーブルータであった場合は、親ルータ装置や途中のルータ装置がないか故障の可能性があり、親ルータ装置までの経路が確立されていないので、ネットワーク機器として起動するか、待機状態とする。

【0168】

また、マスターータ情報としては、ネット番号とマスタ識別子コードの組みとしたが、マスタ識別子コードのみとし、スレーブルータ部では、0x00、マスターータ部では、つながっているサブネットのネット番号で表すようにしてもよい。

【0169】

なお、機器番号については、各サブネット内に閉じられた下位のネットワークが立ち上がる際に、既に割り振られており、この機器番号を、複数のサブネットをまたがる本発明対象のネットワークドメインでのサブネット識別符号内の機器番号に等価変換して用いることができることは言うまでもない。

【0170】

以上のようにすれば、ルータ装置がループを作り出すことをたやすく防止でき、サブネットを管理するルータ装置が、マスターータ側になり、サブネット識別符号の管理が分かりやすくなり、当該ルータ装置を、新たに設ける場合（コールドスタートとも呼ぶ。）や、当該ルータ装置をリセットせずに一旦除去して再度つなげる場合（ウォームスタートとも呼ぶ。）にも、当該ルータ装置のルータ識別子、ネット番号、全ルータ情報、マスターータ情報の設定や回復が、短時間に実現できる。上述の実施形態の説明では、ネットワーク機器では、受信電文のホップ数が0であっても、送信元のネット番号=0x00の設定である電文は、受信先が自分宛てであれば、破棄せず受信する例を説明した。また、ルータ装置は

、電文がルータ情報に関する問い合わせであれば、ネット番号が送信元と自身とで異なっても受信して送信する例を説明した。上述した実施形態においてスレーブルータ部のネット番号は、 $0 \times 0 0$ としていますが、親ルータにより正式に番号が付与されるまでの仮であり、ルータとして起動後は、 $0 \times 0 0$ 以外になっている。

【 0 1 7 1 】

つぎに、図 2 のネットワークにおいて、サブネット C の機器 1、2 3 A が、新たに接続されたり、その機器が携帯機器であって、サブネット C の領域内に移動してきた場合などにおいては、その機器は、通常、サブネット C 内で一意に決まる機器番号を入手後、サブネット C のネット番号を入手するのであるが、何らかの理由で、ネット番号を未入手の場合は、一時的に $0 \times 0 0$ をネット番号として用いる。サブネット A の機器 2、2 1 B も同様の理由により、一時的に $0 \times 0 0$ をネット番号として用いている場合がある。すなわち、ネットワークドメイン全体を見ると、一時的かもしれないが、ネット番号 = $0 \times 0 0$ になっているノードの機器が複数個存在する可能性がある。このような状態で、機器 1、2 3 A が、サブネット C 以外のサブネット A や B のネット番号を相手先の D N A とする電文を発行したり、一斉同報の電文を発行した場合、ルータ装置 3 2 が、サブネットを超えて電文をルーティングすると、サブネット A の機器 2、2 1 B やルータ装置 3 1 は、本来処理しなくてよい電文を受けることになり、余分な処理が発生する恐れがある。特に、その電文が応答を要求する電文の場合、ルータ装置 3 1 が応答電文を発行すると、その電文の D N A = $0 \times 0 0$ であるので、サブネット A の機器 2、2 1 B も電文を受取り、機器 2、2 1 B は、無駄な処理を行なうことになる。あるいは、送信元のノードの機器 1、2 3 A から何らかの電文を受けたサブネット A のルータ装置 3 1 や親ルータ装置 2 1 A は、自サブネット A 内の機器 2、2 1 B からの電文と判断し、システム上問題が発生する可能性が高くなる。とくに、ホップ数を監視してホップ数により適正な処理を行なう機能が無い場合や、その機能が故障している場合には、このようなことが起こりうる。

【 0 1 7 2 】

このような危険を避ける 3 つの方法について説明する。第 1 の方法として、D

NAとして他のサブネットが指定されている電文（一斉同報、ドメイン内一斉同報を含む）であって、そのSNAのネット番号が0x00である電文を、ルータ装置が受信した場合は、ルータ装置は、その電文のルーティングをサブネットを超えては、行なわないようにする。第2の方法として、受信ノード、機器、装置では、SNA=0x00の電文については、ホップ数を監視し、ホップ数が0以外、すなわち、他のサブネットを経由してきた電文を破棄するようにする。第3の方法として、ネット番号=0x00になっている機器は、サブネットを跨ぐ電文を発行しないようにする。

【0173】

第1と第3の方法は、ホップ数を監視する機能を持たない機器がサブネットAに接続されている場合に有効である。

【0174】

上記第1の方法を実行するには、受信した電文のSNA=0x00で、かつ、DNAがルータ自身のネット番号以外のネット番号であるかどうかの解析手順、および、受信した電文のSNA=0x00で、かつ、一斉同報の識別子が一斉同報かどうかの解析手順を設け、受信電文を解析することにより、いずれかの解析結果がYESであれば、受信電文が上記条件に合致するので、その結果に基づいて、受信した電文のルーティングを行なわない手順を実施する。（ルーティングの停止とは、ルータによる電文の破棄と同義である。）

上記第2の方法を実行するには、受信した電文のSNA=0x00で、かつ、一斉同報の識別子が一斉同報になっており、かつ、ホップ数が1以上であるかどうかの解析手順を設け、受信電文を解析することにより、解析結果がYESであれば、受信電文が上記条件に合致するので、その結果に基づいて、受信電文の破棄を行なう手順を実施する。

【0175】

第3の方法では、機器は、自身のネット番号=0x00の場合は、既に説明した、ネット番号を問い合わせる手順の電文を発行して、所属するサブネット上のルータや機器からネット番号を入手し、そのネット番号以外のネット番号をDNAとする電文は、当面、発行しないようにするとともに、一斉同報電文

は発行しないようにする手順を設ければよい。（一斉同報電文を発行されると、第1、第2の方法で、対処するしかない。）

既に、ルータに関連する電文において、その電文の内容がどのようなものであるかを示すために、オブジェクトプロパティコードOPCを使用する例について説明しているが、そのオブジェクトプロパティコードOPCの決めかたの一例について詳しく説明する。プロパティ名称、プロパティコード、プロパティの内容とその値の表記法、データ型、データのサイズ、アクセスルール、必須かどうか、状態変化時のアナウンスなどについて、各プロパティ毎に順次説明する。

【0176】

動作状態プロパティは、OPC=0x80で、ネット番号サーバ機能、あるいはルータ機能の動作状態を示す。起動中=0x30、未起動中=0x31とし、データ型=UC (unsigned Characterを示す)、サイズ=1バイト、アクセスルール=Set/Getである。Setはプロパティ値の書き込みを意味し、Getはプロパティ値の読み出しを意味する。Getは必須、状態変化時のアナウンス=必須である。本プロファイルクラスは、ノードがネット番号サーバ機能或いはルータ機能を持っていれば存在し、本プロパティは、そのネット番号サーバ機能或いはルータ機能が起動（ルータとして動作）しているかどうかを示す。

【0177】

異常内容プロパティは、OPC=0x89で、異常内容を示す。0x0000~0x000F (0~15) の値を取り、データ型=UC、サイズ=2バイト、アクセスルール=Get、必須ではなく、状態変化時のアナウンスも必須でない。本プロパティでは、その値として、0x0000=異常なし、0x0001=親ルータなし（接続されたサブネットの全てにネット番号が付与されていない状態で、且つ親ルータも存在しない。）、0x0002=親ルータからの情報取得失敗（ドメイン内にネット番号サーバ機能は検出できたが、ネット番号サーバ機能からのルータ情報及び全ルータ情報の取得ができなかったことを示す。）、0x0003=サブネット通信異常（自己が接続されている2つ以上のサブネットのうちのいずれかで通信が出来ない状態になった。）、0x0004~0x00

0F = ユーザ開放、0x0010 ~ 0xFFFF = 将来規定用とする。

【0178】

自ルータ情報プロパティは、OPC = 0xE0 で、自ルータ情報を示す。1 バイト目 = ルータ属性、2 バイト目 = 自ルータ ID (デフォルト値 = 0x00)、3 バイト目 = 接続ネット数、4 バイト目以降 = EA 情報 (エコネットのネットアドレス、各 2 バイト、接続ネット数分)、データ型 = UC、サイズ = 最大 17 バイト、アクセスルール = Set / Get、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない。本プロパティでは、1 バイト目は、ルータの属性を示す。このコードで示される属性は、ネット番号サーバ機能の有無、ルータ機能の有無、ルータ情報自動設定機能の有無により決める。また、ルータ装置は、上記説明した立ち上げシーケンスにより、ルータとして必要な情報を自動的に取得するものとするが、ビルなど一般家庭以外においては、サブネットがドメイン内で一意に保証される限りにおいて、上記立ち上げシーケンスに従わないケースもあり得る。ルータ情報自動設定機能の有無は、上記シーケンスの機能の有無を示し、無しの場合は、上記シーケンスに従わないルータであることを示す。1 バイトの中のビット配列は、B0 = ネット番号サーバ機能の有無 (1 = 有、0 = 無)、B1 = ルータ機能の有無 (1 = 有、0 = 無)、B2 = 自動設定機能の有無 (1 = 有、0 = 無)、B3、B4、B5、B6、B7 = 00010 とする。B0 = B1 = 0 というケースはない。因みに、B0 = 0、B1 = 1 の場合が一般ルータであり、B0 = 1 の指定がある場合が親ルータである。2 バイト目の自ルータ ID は、ドメイン内のルータにおいて一意となる値であり、自動設定においては、親ルータによって一意に決められる値である。3 バイト目の接続ネット数は、最大 7 とし、8 以上のサブネットにつながるルータについては、将来ルータ属性が変わるものとして対応してもよい。4 バイト目以降では、ネットアドレス情報を接続サブネット数分すべて格納するものとする。

【0179】

ネット番号プロパティは、OPC = 0xE1 で、1 バイトのネット番号の値を示す。初期値は、0x00 であり、データ型 = UC、サイズ = 1 バイト、アクセスルール = Set / Get、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない

。本プロパティは、ルータの立ち上げシーケンスにおいて、マスタールータ或いは親ルータから取得したネット番号を格納する。ルータは複数のサブネットにまたがるため、それぞれのサブネット上にルータプロファイルオブジェクトを持つ。本プロパティは、それぞれのサブネットにより見える値は異なる。

【0180】

ルータIDプロパティは、OPC=0xE2で、1バイトのルータIDの値を示す。初期値は、0x00であり、データ型=UC、サイズ=1バイト、アクセスルール=Set/Get、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない。ルータIDは、親ルータにより付与され、ルータを一意に識別する識別子である。親ルータにより一括管理される。

【0181】

親ルータ情報プロパティは、OPC=0xE3で、親ルータのEA（エコネットのネットアドレス）を示す。初期値は、0x0000（親ルータ情報なし）であり、データ型=UC、サイズ=2バイト、アクセスルール=Set/Get、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない。

【0182】

全ルータ情報プロパティは、OPC=0xE4で、ドメイン内の全ルータ情報を示す。データ型=UC、サイズ=最大246バイト、アクセスルール=Set/Get、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない。

【0183】

登録要求ルータ情報プロパティは、OPC=0xE5で、登録要求ルータ情報を示す。1バイト目=ルータ属性、2バイト目=自ルータID（デフォルト値=0x00）、3バイト目=接続ネット数、4バイト目以降=EA情報（エコネットのネットアドレス、各2バイト、接続ネット数分）であり、データ型=UC、サイズ=最大17バイト、アクセスルール=Setのみ、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない。本プロパティは、ネット番号サーバ機能を有するノードに必須である。一般ルータは、ルータの立ち上げシーケンスにおいて、本プロパティに、一般ルータを構成する全てのノードのネットアドレス（全EA情報）を書き込むことにより、ネット番号サーバ機能を有するノードに自己のネッ

トアドレス (EA) 情報を通知する。ネット番号サーバ機能を有するノードは、ルータの立ち上げシーケンスにおいて、一般ルータから本プロパティに設定要求された内容に基づき、当該一般ルータのルータプロファイルの自ルータ情報プロパティ、全ルータ情報プロパティに書き込み要求を実施する。

【0184】

マスタールータ情報プロパティは、OPC=0xE6で、マスタールータ情報を示す。1バイト目=マスタールータ識別子 (マスタールータ=0x41、スレーブルータ=0x42)、2バイト目=ネット番号情報、データ型=UC、サイズ=2バイト、アクセスルール=Getのみ、必須であり、状態変化時のアナウンスは必須でない。本プロパティは、一般ルータの立ち上げシーケンスにおいて使用する。ルータは複数のサブネットにまたがるため、それぞれのサブネット上にルータプロファイルオブジェクトを持つ。本プロパティは、それぞれのサブネットにより、見える値が異なる。

【0185】

なお、状態変化時のアナウンスが必須の場合は、プロパティ実装時には、必ず処理を行なうものとする。また、同一の装置内に、複数のノードがある場合、各ノード毎に上記プロファイルクラスをもつが、その中の、ネット番号=0xE1以外の全てのプロパティについては、装置として共通の値を保持するものとする。

【0186】

以上説明したルータのプロファイルクラスにおけるプロパティは、クラスグループコード=0x0E、クラスコード=0xF1、インスタンスコード=0x01に割り当てる。

【0187】

つぎに、ルータプロファイルクラス処理仕様について詳しく説明しておく。なお、以下の説明において、EPC、EDTは、それぞれ、これまでのOPC、ODTと同義である。

【0188】

ルータプロファイルクラスに関して、複数のノードで構成される通信装置あ

ても、ルータ機能を持たない場合には、本ノードはルータプロファイルクラスを保持しないことにする。一般ノードでは処理搭載必須とする。

【0189】

本クラスは、ノードがNetIDサーバ機能、或いはルータ機能を持っている場合には、必ず実装していることとする。ルータと親ルータでは処理搭載必須とする。

【0190】

ルータプロファイルクラスにおいて、同一の装置内に複数のノードがある場合、ルータとして動作する装置内の各ノード毎に本プロパティを持ち、NetID (EPC=0xE1)、マスタルータ情報 (EPC=0xE6) 以外のプロパティは、共通の値が保持されていることにする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0191】

ルータプロファイルクラスで規定された必須プロパティは実装していることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0192】

動作状態 (EPC=0x80)、自ルータ情報 (EPC=0xE0)、NetID (EPC=0xE1)、ルータID (EPC=0xE2) 「親ルータ情報 (EPC=0xE3)、全ルータ情報 (EPC=0xE4)、マスタルータ情報 (EPC=0xE6) の各プロパティは、アクセスルールGet (他ノードから参照できるプロパティ、つまりESV=0x62, 0x63) が実装されていることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0193】

動作状態 (EPC=0x80) のプロパティは、状態が変わった時点でドメイン内一斉同報として状況変化時アナウンスを行うこととする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0194】

動作状態プロパティは、NetIDサーバ機能、或いは、ルータ機能が起動しているかどうかを示し、起動中であれば0x30が、未起動中であれば0x31

が設定されていることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0195】

異常内容プロパティは、異常内容（EPC=0x89）のプロパティ内容の値（EDT値）として、0x0004～0x000F、及び、0x0010～0xFFFFの範囲の値は設定しないこととする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0196】

異常内容プロパティは、異常内容（EPC=0x89）のプロパティ内容の値（EDT値）として、異常無しの場合は0x0000、親ルータの存在が検知できなかった場合は0x0001、親ルータからの情報取得に失敗した場合は0x0002、ルータが接続されるサブネットのいずれかで通信ができなかった場合には0x0003の値を設定することとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0197】

自ルータ情報プロパティは、1バイト目でルータ属性を示し、2バイト目で自ルータIDを示し、3バイト目で接続Net数、4バイト目以降で自装置で保持しているEAを全て（接続Net数分のEA）を設定していることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0198】

自ルータ情報プロパティは、1バイト目のB3～B7は、B3：B4：B5：B6：B7=0：0：0：1：0固定となっていることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0199】

自ルータ情報プロパティは、NetIDサーバ機能を有している場合、NetIDサーバ機能の起動中の如何にかかわらず1バイト目のB0は1となっていることとする。また、機能を有していない場合には1バイト目のB0は0となっていることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0200】

自ルータ情報プロパティは、NetIDサーバ及びルータでは、必ずルータ機

能は保持していることとする。1バイト目のB1は1であることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0201】

自ルータ情報プロパティは、上記立ち上げシーケンスの機能が無い場合には、1バイト目のB2を0とし、機能がある場合には1バイト目のB2を1とする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0202】

自ルータ情報プロパティは、一般ルータにおいては、2バイト目の自ルータIDに親ルータによって0x00以外の値が指定されない限り、ルータとして動作しないこととする。ルータは処理搭載必須とする。

【0203】

自ルータ情報プロパティは、3バイト目の接続Net数は、7以下の値であることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0204】

NetIDプロパティは、NetIDサーバにおいては、NetIDサーバ機能起動時に0x00以外の値を設定することとする。親ルータは処理搭載必須とする。

【0205】

NetIDプロパティは、一般ルータにおいては、NetIDサーバ或いはマスタールータから取得した値を格納することとする。ルータは処理搭載必須とする。

【0206】

NetIDプロパティでは、それぞれのサブネット毎に見える値が異なる（読み出しに対して、それぞれのサブネットの値を返す）ようになっていることとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0207】

NetIDプロパティは、一般ルータでスレーブ側は、マスタールータからのSet以外は受け付けないこととする。ルータは処理搭載必須とする。

【0208】

NetIDプロパティは、通常動作中、既に保持しているNetIDの値と異なる値の本プロパティへの書き込み要求をマスタールータから受けた場合、停止を経てウォームスタート、或いはコールドスタートを実行することとする。ルータは処理搭載必須とする。

【0209】

NetIDプロパティは、通常動作中、既に保持しているNetIDの値と異なる値の本プロパティへの書き込み要求は受け付けないこととする。親ルータは処理搭載必須とする。

【0210】

NetIDプロパティは、ルータ機能或いはNetIDサーバ機能非起動時は、本プロパティは、SetもGetも受け付けず（外部からは見えないようにし）、プロパティマップからも本プロパティの存在を消すこととする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0211】

ルータIDプロパティは、一般ルータにおいては、立ち上げシーケンスにおいて、親ルータにより書き込まれた自ルータ情報の2バイト目の値を、自身で設定し、外部からの書き込み要求は受け付けないこととする。ルータは処理搭載必須とする。

【0212】

ルータIDプロパティは、NetIDサーバ（親ルータ）においては、NetIDサーバとして起動時には、自身で設定し、外部からの書き込み要求は受け付けないこととする。親ルータは処理搭載必須とする。

【0213】

登録要求ルータ情報プロパティは、NetIDサーバにのみ存在することとする。（一般ルータには存在しないものとし、NetIDサーバ機能があっても、一般ルータとして立ち上がった場合には、開示しないものとする。）、ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0214】

登録要求ルータ情報プロパティは、NetIDサーバは、本プロパティへの書

き込み要求が行われた場合には、一般ルータからの登録要求として、要求のあったルータの立ち上げ処理（ルータとして立ち上げ設定可能と判断した場合、当該一般ルータのルータプロファイルの「自ルータ情報」プロパティ及び全ルータ情報プロパティに書き込み要求を実施する。）を行なう。親ルータは処理搭載必須とする。

【0215】

親ルータ情報プロパティは、一般ルータ（スレーブ側）は、マスタールータからの取得により設定し、他からの書き込み要求は受け付けないこととする。ルータは処理搭載必須とする。

【0216】

親ルータ情報プロパティは、一般ルータ（スレーブ側）、NetIDサーバ共に、それぞれ一般ルータ及びNetIDサーバとして起動するまではデフォルト値の0x0000を保持することとする。ルータは処理搭載必須とする。

【0217】

親ルータ情報プロパティは、親ルータ（NetIDサーバ）は、自身のネットアドレス（EA）の値を設定し、他からの書き込み要求は受け付けないこととする。親ルータは処理搭載必須とする。

【0218】

全ルータ情報プロパティは、一般ルータ（スレーブ側）は、マスタールータ或いは親ルータからの書き込みにより設定されるものとし、マスタールータ及び親ルータ以外からの書き込みの要求は受け付けないこととする。ルータは処理搭載必須とする。

【0219】

全ルータ情報プロパティは、NetIDサーバは、ドメインの構成が変わったことを検出（新規一般ルータの参入や、再設定等）時には、全ての一般ルータの全ルータ情報プロパティに対して最新の情報の書き込み処理を行うこととする。親ルータは処理搭載必須とする。

【0220】

マスタールータ情報プロパティは、ルータとして動作し、ルータプロファイルク

ラスを開示しているサブネットにおいて、マスタールータかどうかを示すものとし、マスタールータである場合、0 x 4 1 の値を設定し、スレーブルータである場合、0 x 4 2 の値を設定するものとする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0 2 2 1】

マスタールータ情報プロパティでは、マスタールータ情報は、親ルータから設定された（親ルータにおいては、自分自身の内部で設定の）自ルータ情報を元に、ルータ内部で設定し、外部からは読み出しのみ可能とする。ルータと親ルータは処理搭載必須とする。

【0 2 2 2】

なお、本発明の、ルータ装置およびルータ装置の設定方法のプログラムを記録した記録媒体は、プログラムを記録したROM、RAM、フレキシブルディスク、CD-ROM、DVD、メモ리카ード、ハードディスクなどの記録媒体をいう。また、電話回線、搬送路などの通信媒体も含む概念である。

【0 2 2 3】

【発明の効果】

以上説明したように、本発明によれば、システム全体としてリセットがかかった場合、また、特定のルータが単独でリセットがかかった場合或いは置き換えを行った場合でも、全体システムとして或いは部分的なシステムとしては支障無く通信を行うことができ、短時間での再立ち上げが可能となる。

【0 2 2 4】

また、システム全体としてリセットがかかった場合、また、特定のルータが単独でリセットがかかった場合或いは置き換えを行った場合でも、置き換え以前の状態を自動的に維持することができ、機器の管理を行うコントローラ等で把握している情報を再設定する必要が無く、システム運用が容易となる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 本願発明が適用されるホームネットワークの概念図である。

【図 2】 本願発明が適用されるホームネットワークの構成例を示す図である。

【図 3】 本発明のルータ装置の一構成例を示す図である。

【図 4】 本発明のルータ装置のもつサブネット識別符号の一構成例を示す図である。

【図 5】 本発明のルータ装置のもつ親ルータ情報の一構成例を示す図である。

【図 6】 本発明のルータ装置に使用する通信電文の一構成例を示す図である。

【図 7】 サブネットに接続されるネットワーク機器の一構成例を示す図である。

【図 8】 本発明のルータ装置の設定方法の手順のフローチャートの例を示す図である。

【図 9】 本発明のルータ装置の設定方法の手順のフローチャートの例を示す図である。

【図 10】 本発明のルータ装置の別の実施の形態を採用したネットワークの例を示す図である。

【図 11】 本発明のルータ装置の別の実施の形態を採用した場合の設定方法の手順のフローチャートの例を示す図である。

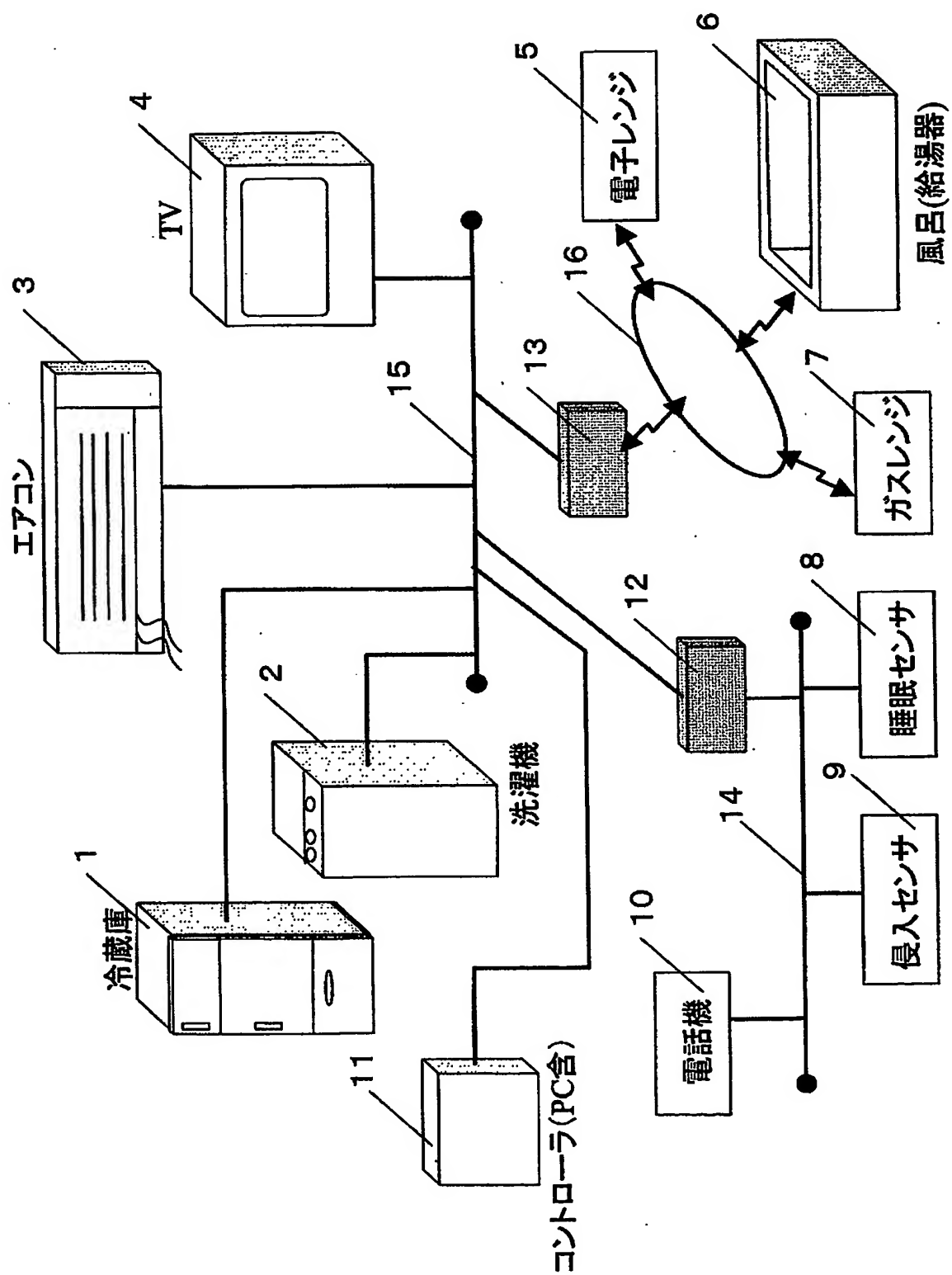
【図 12】 本発明のルータ装置の設定方法の手順のフローチャートの一部分の例を示す図である。

【符号の説明】

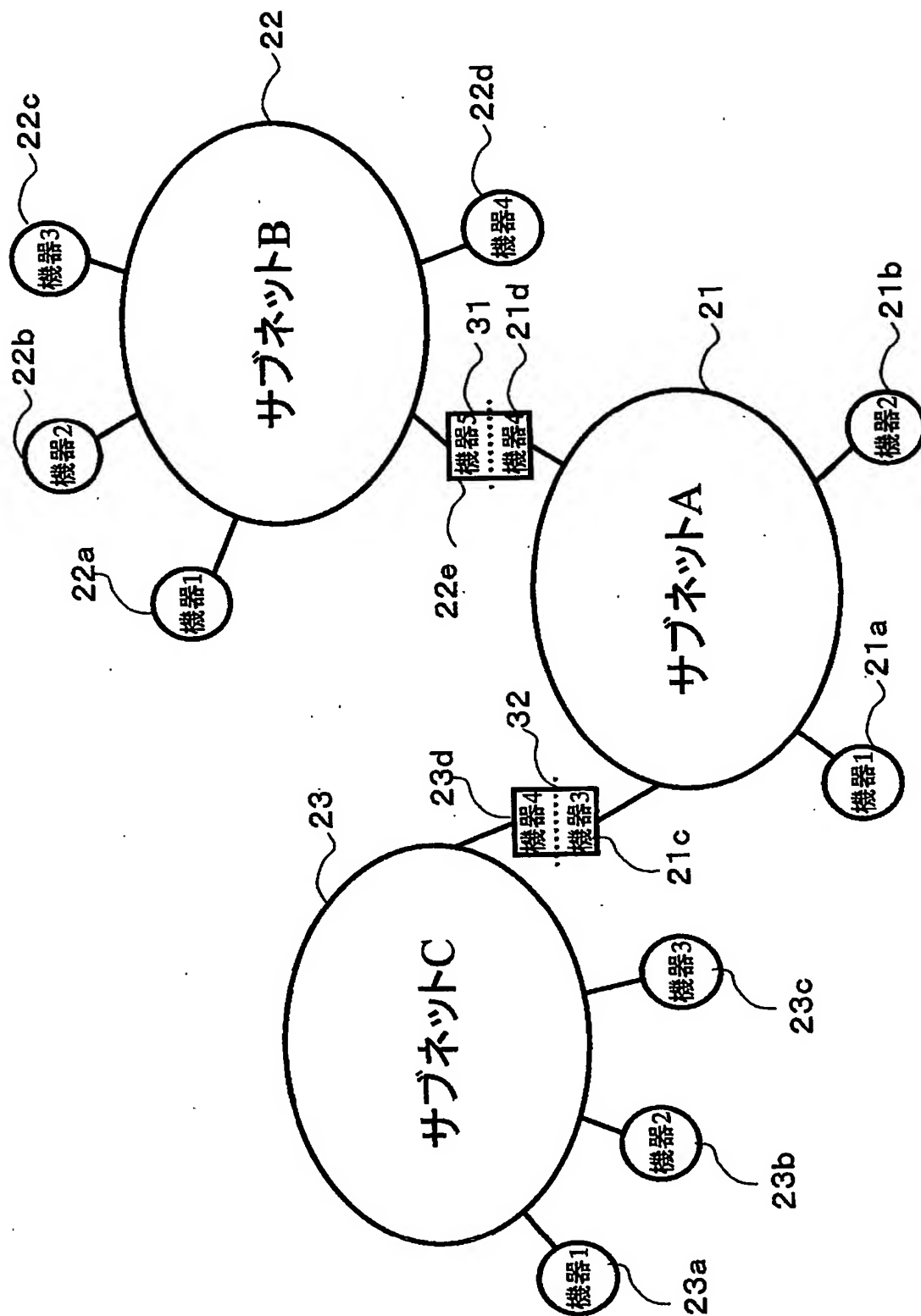
- 3 1 0 ルータ立ち上げ処理部
- 3 1 1 全ルータ情報保持部
- 3 1 2 親ルータ情報保持部
- 3 1 3 サブネット識別符号情報保持部
- 3 1 4 a、3 1 4 b サブネット識別符号情報請求手段
- 3 1 5 a、3 1 5 b サブネット識別符号情報通知手段
- 3 1 6 a、3 1 6 b サブネット識別符号情報確認手段
- 3 1 8 電文ルーティング処理部
- 3 1 9 a、3 1 9 b サブネット内通信処理部

【書類名】 図面

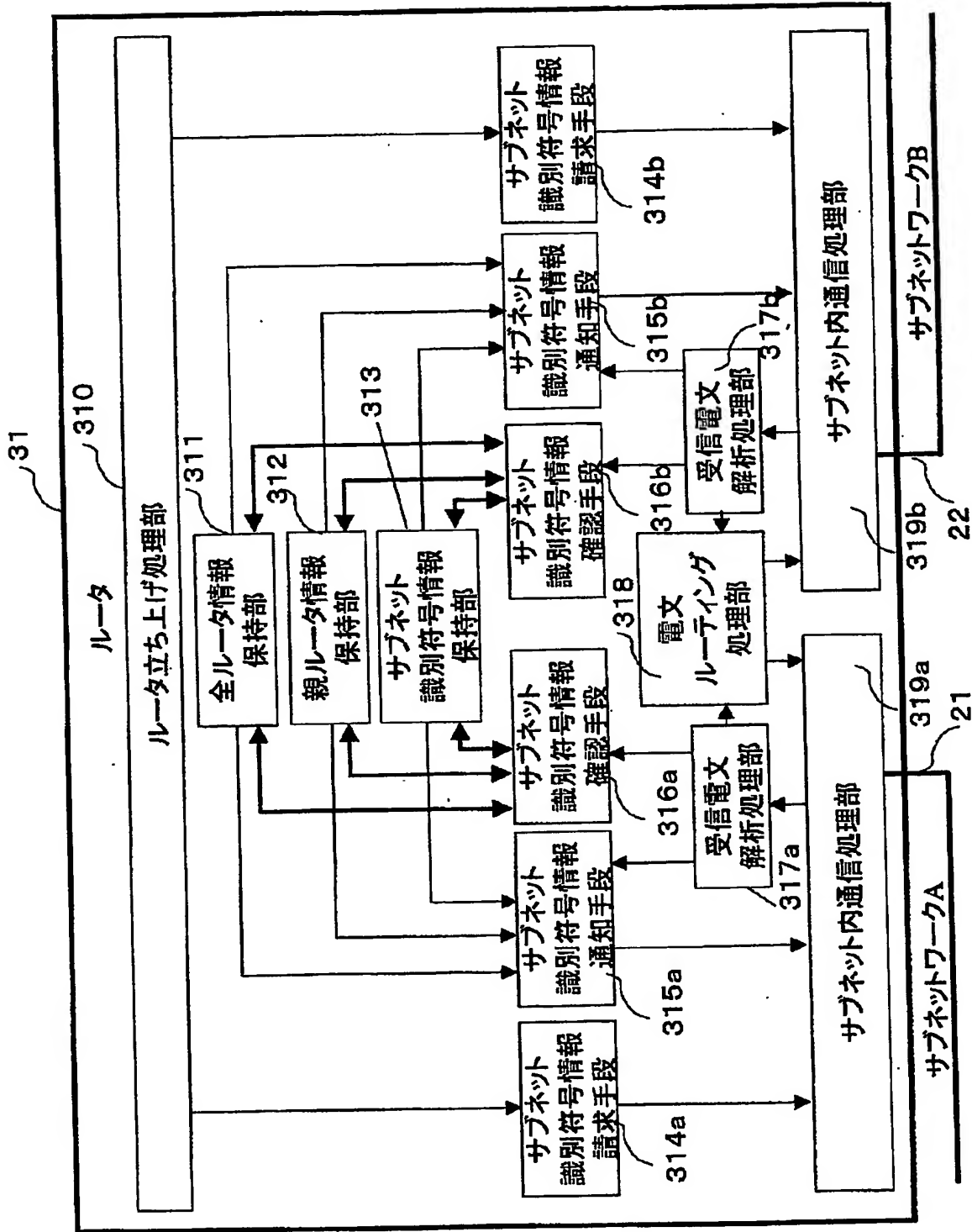
【図 1】



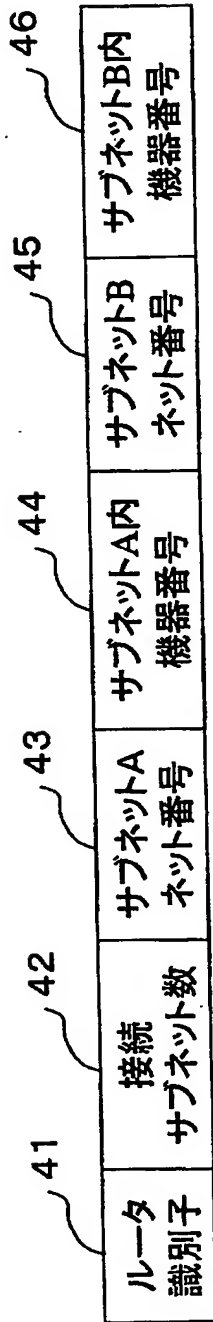
【図 2】



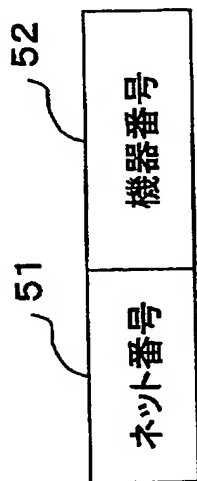
【図 3】



【図4】



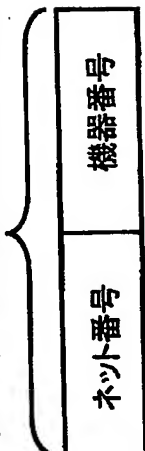
【図 5】



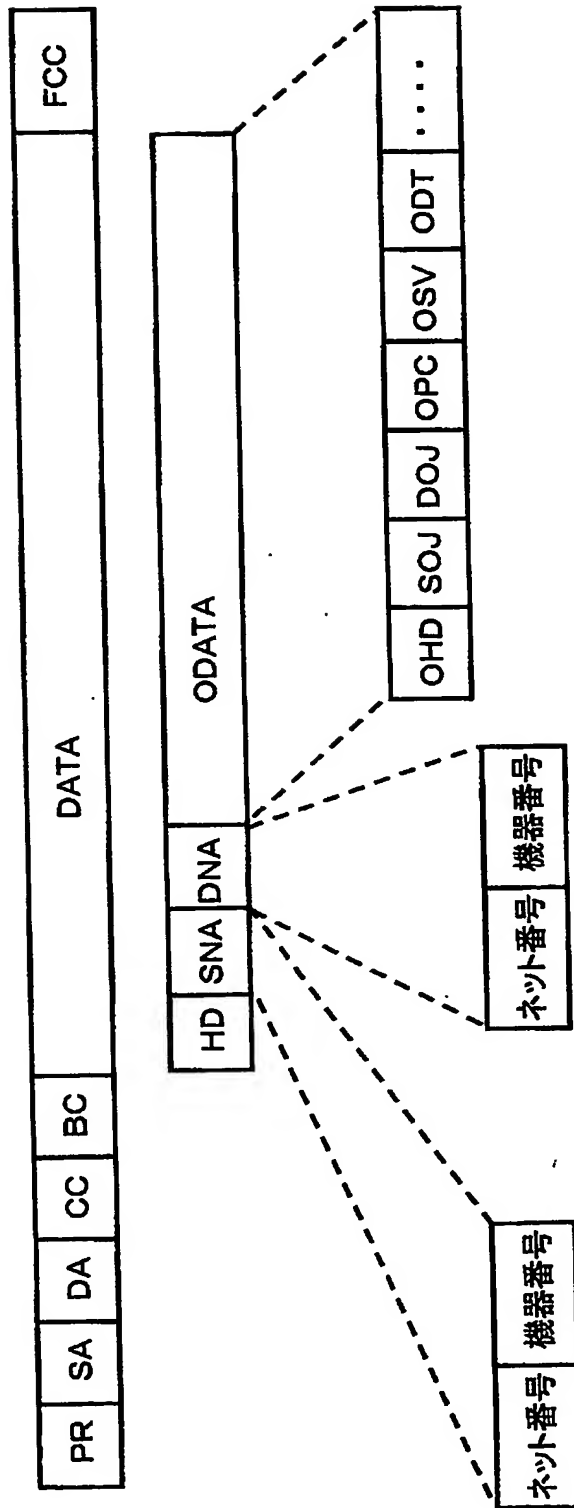
【図 6】

(A) サブネット識別符号

サブネット識別符号(ネットアドレス)



(B) 電文構成例

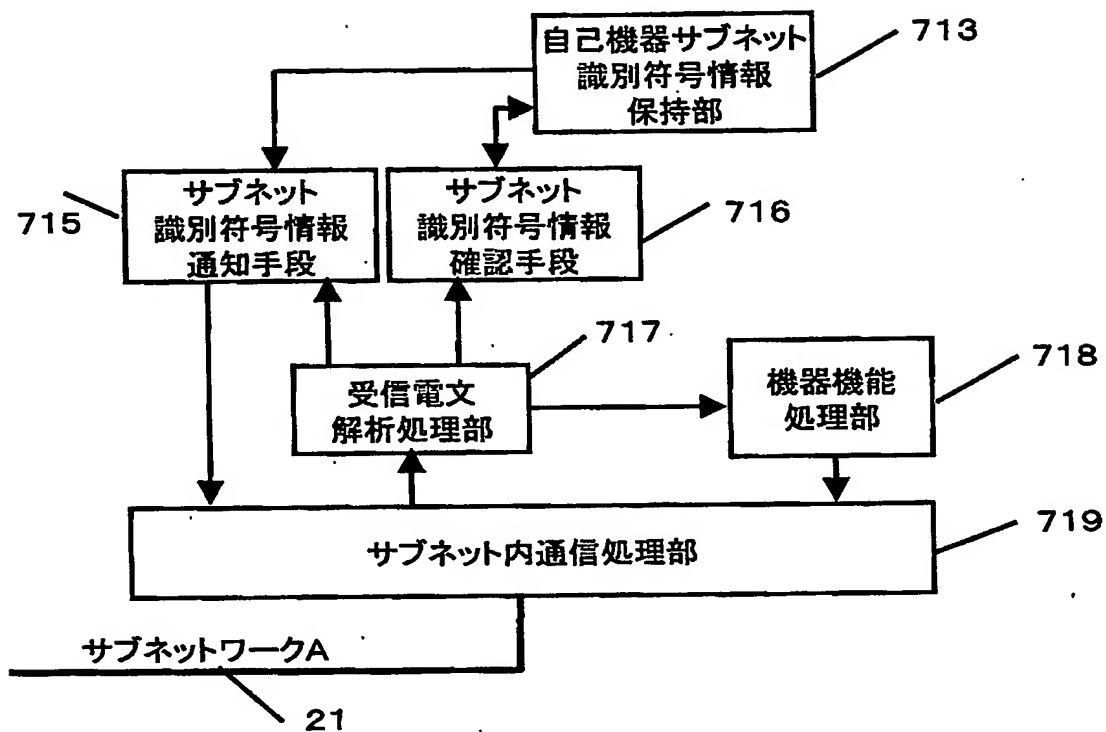


DNA: 受信先サブネット識別符号

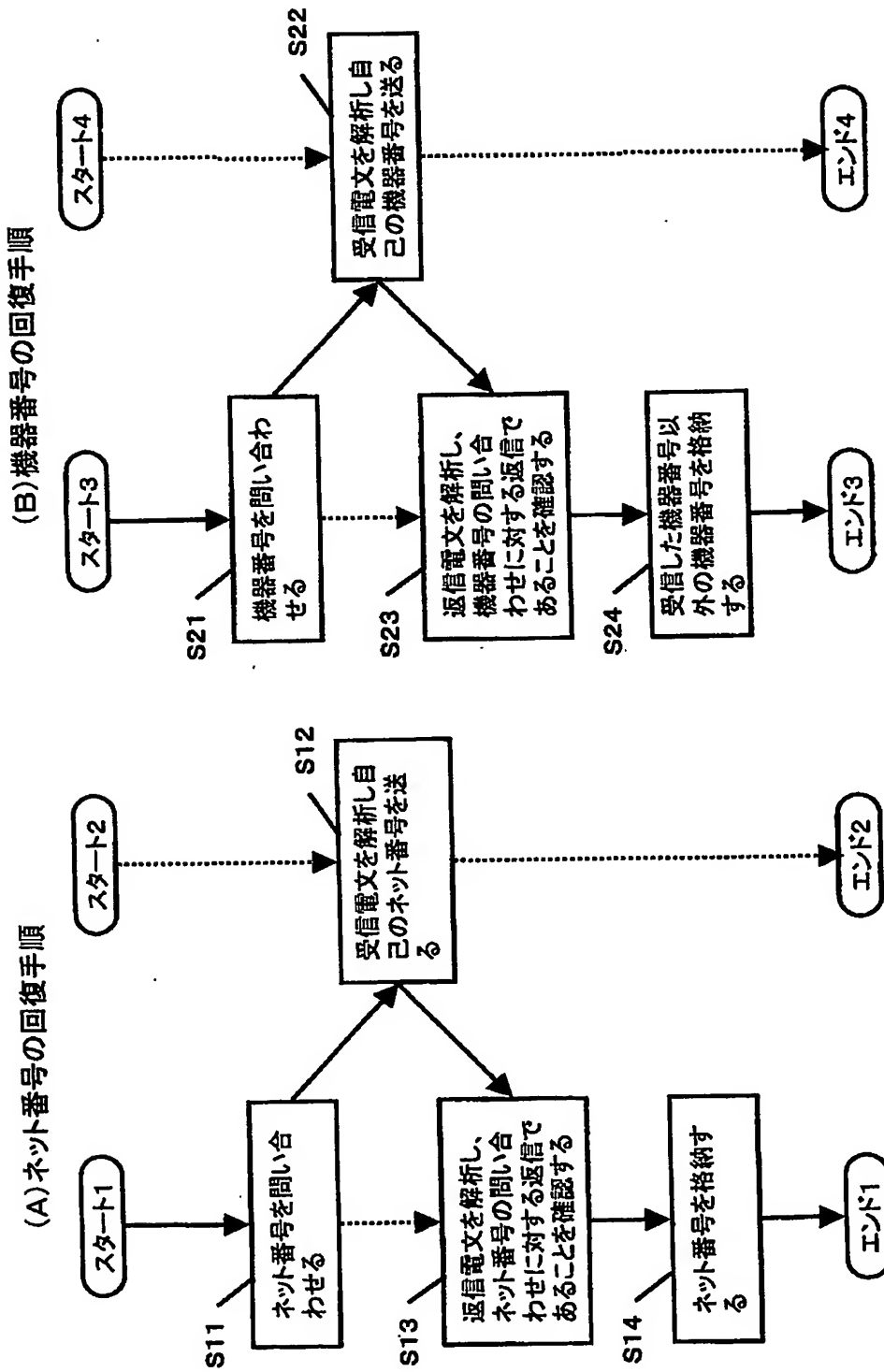
SNA: 送信元サブネット識別符号

【図 7】

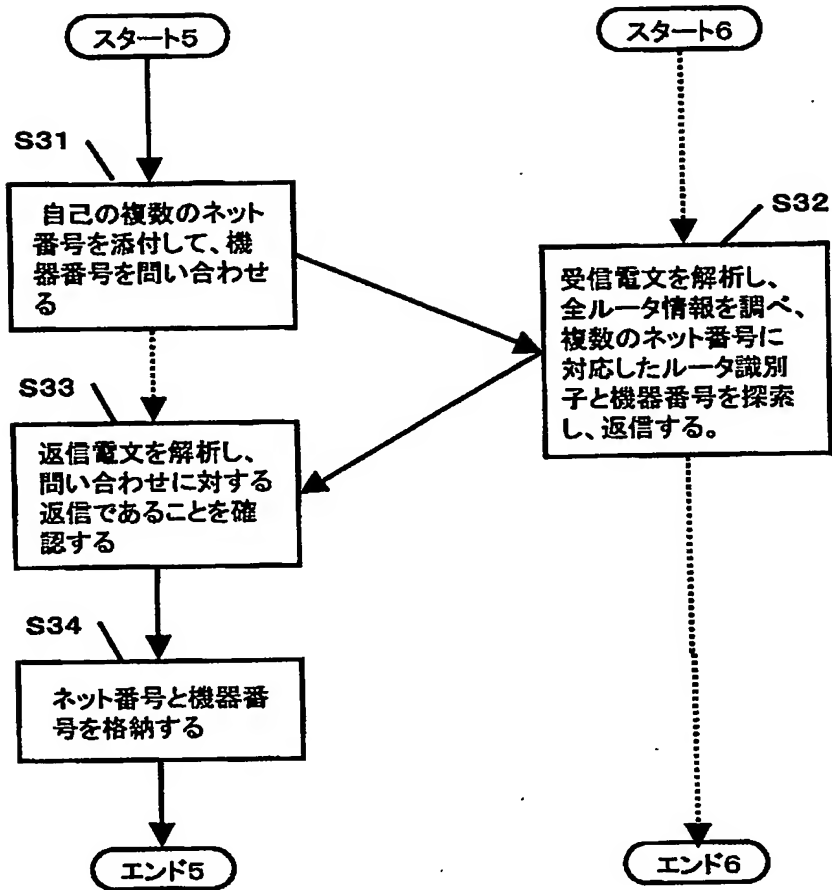
ネットワーク機器 21b



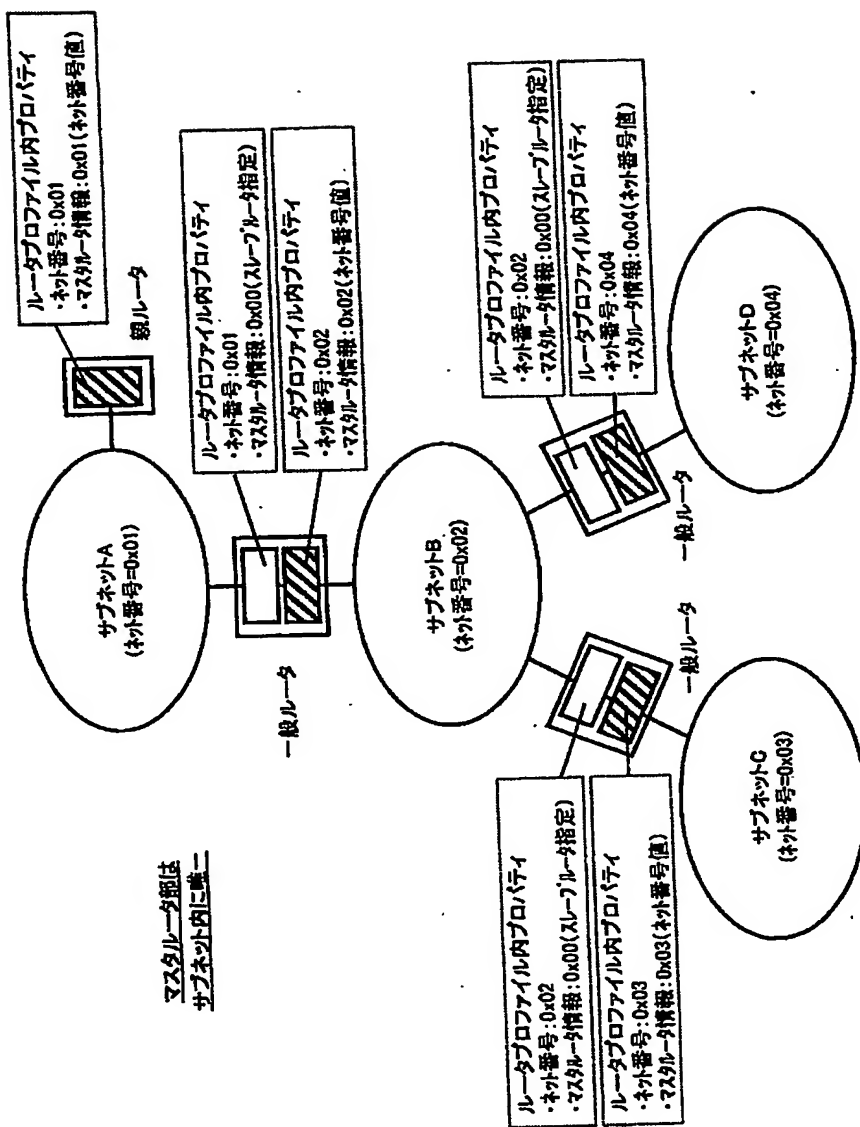
【図 8】



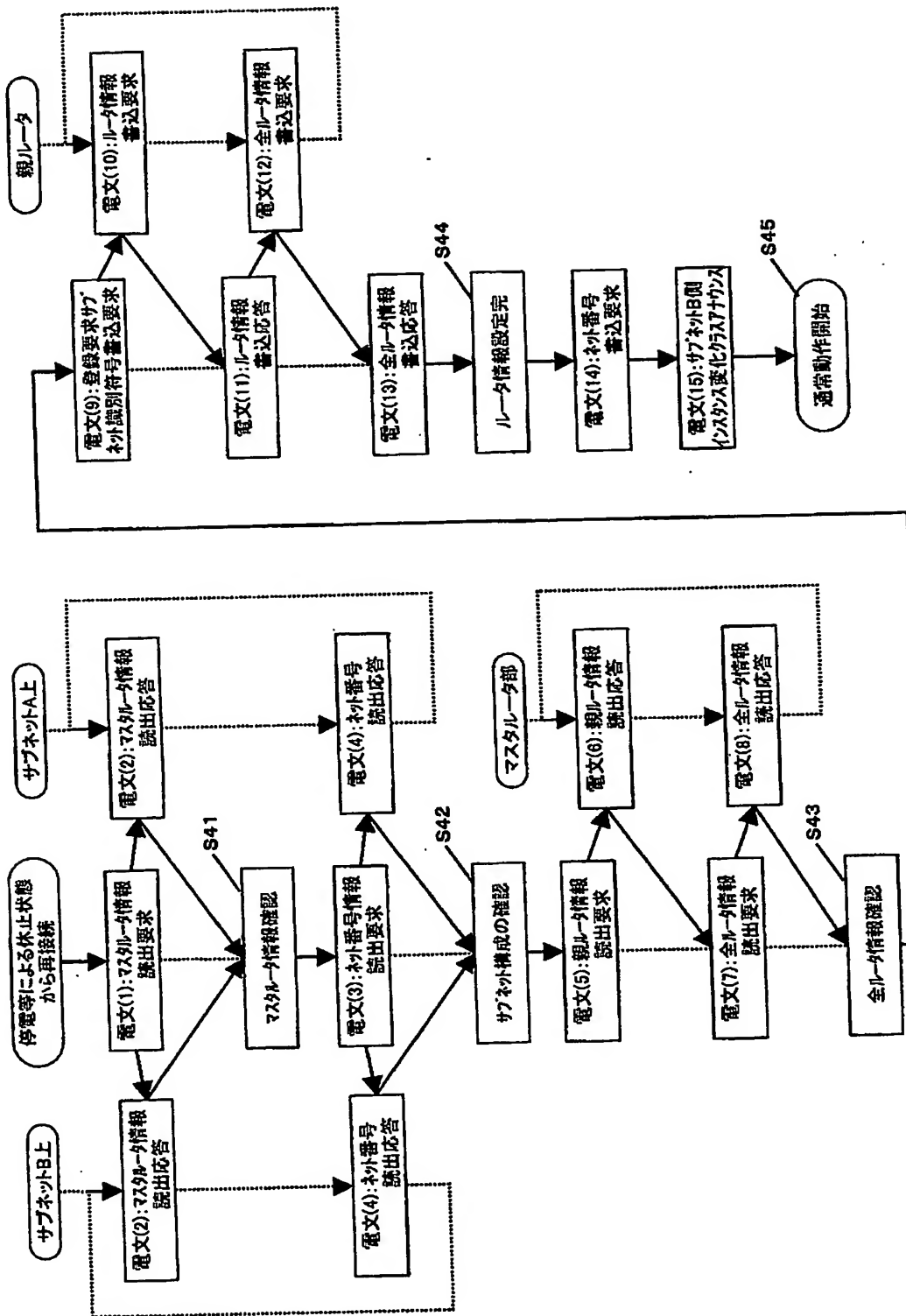
【図9】



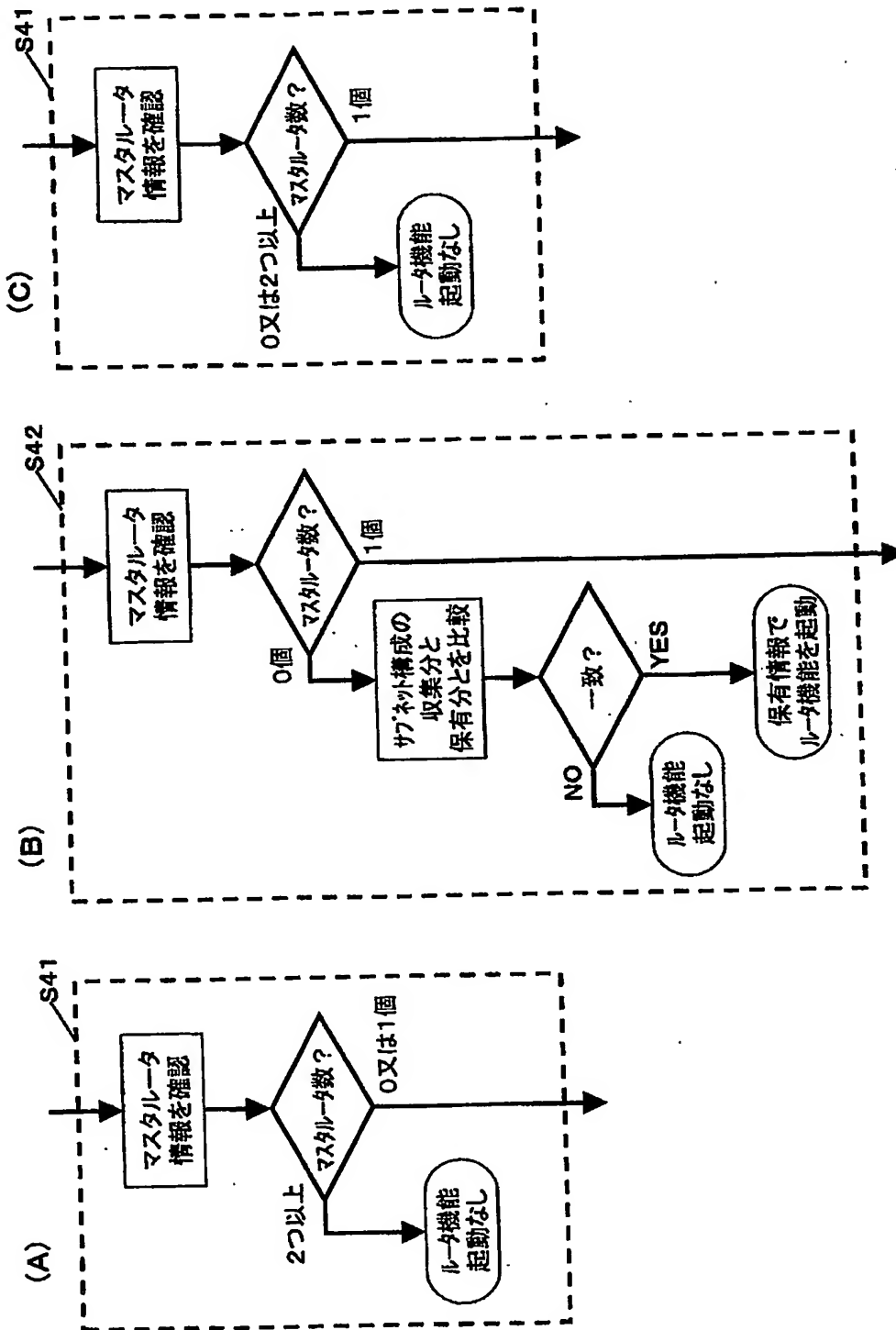
【図10】



【図11】



【図12】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 電源リセットやルータの置き換えによりネットワーク上に接続された機器に対してネットワーク番号が誤認識される、又は再付与を必要とする課題があった。

【解決手段】 ルータの取り替え時或いは再起動時のルータ起動時に、ルータが接続されたサブネット上のルータに対して行う問い合わせによりサブネットの識別子情報を取得した場合に、ルータのそのサブネットに属する側の保持するサブネットの識別子情報を、他のルータまたはルータ以外の機器に対して行う問い合わせにより取得した識別子情報に書き換える。

【選択図】 図 3

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000005821]

1. 変更年月日	1990年 8月28日
[変更理由]	新規登録
住 所	大阪府門真市大字門真1006番地
氏 名	松下電器産業株式会社